

タイトル	北野潔「北海道炭鉱汽船(株)夕張鉱業所の発達と夕張新鉱ガス爆発」 北海道炭鉱汽船(株)百年史編纂(1)
著者	大場，四千男；OHBA, Yoshio
引用	開発論集(87)：227-271
発行日	2011-03-01

北野潔「北海道炭鉱汽船(株)夕張鉱業所の発達と 夕張新鉱ガス爆発」

北海道炭鉱汽船(株)百年史編纂(-)

大 場 四千男*

はじめに——解題

北海道の発達史に北海道炭鉱汽船株式会社が果たした役割は想像を絶するほどの大きなものであるが、この点については経済史、経営史、及び北海道史学において周知の事実となっている。北海道炭鉱汽船株式会社（以後、北炭と略す）は社史として既に『五十年史』、及び『七十年史』を刊行し、その歴史の歩みの大きさを自から明らかにしている。しかし、北炭が明治22年(1899)に有限会社北海道炭鉱鉄道会社として設立されてから平成23年(2011)には112年を迎えるが、昭和56年10月16日の夕張新鉱ガス突出災害で経営破綻する。したがって今日では北炭は石炭鉱業から撤退し、消滅しつつある状態となっていることから北炭百年史を編纂することはほとんど見込まれない状況となっている。

それゆえ、ここでは北炭百年史編纂への一里塚として北炭社員の原稿を集め、北炭百年をその内側から描いて、北炭の百年史の空白を埋める作業を進め、北炭百年史を編纂する次第である。すなわち、ここでは北炭職員組合（夕張新鉱）委員長を務めた北野潔の原稿を取りあげ、北炭の歩みを内面的に浮きぼりにしようとするものである。したがって、このように北野潔が描く北炭史は北炭百年史の一里塚となることから、この編纂は「五十年史」と「七十年史」に続く「百年史」と位置づけることができると考える。

なお、この北炭百年史の課題は、五十年史が北炭の成立過程を、さらに七十年史がその発達過程を焦点にして北炭の歩みを描いているのに対し、昭和40年以降における北炭の災害の軌跡と経営破綻過程とを解明するところに歴史的意義を有するものである。ここで取りあげる北野潔は昭和21年5月に採炭員として採用され、夕張鉱業所二鉱に配置され、復興期の石炭増産に取組み、傾斜生産方式の推進役を果たすのである。次に、係員に就任する北野潔は昭和30年代前後における鉄柱カッペ採炭を中心とする機械化を推進し、長壁式量産出炭体制の確立に全力を注ぐのである。この結果、北野潔を代表とする係員の活躍を背景にして自立期から高度経済成長期にかけての北炭は荻原吉太郎社長の下に経営基盤を確立する。その背景には係員層の中間的管理者層、特に、北野潔、吉田文男、そして、小野博旨等の係員等の勤労革命が北炭の自立

*（おおば よしお）開発研究所研究員，北海学園大学経営学部教授

経営を育くみ、北炭は開坑と採炭の上流と選炭－運搬－販売の下流とを統合する大手炭鉱企業として発展するのである。

しかし、他方、昭和 36 年の石油業法の制定は油炭格差と熱効率の優劣差とから石油をエネルギー革命の担い手に成長させる。つまり、外資系石油会社を中心とする石油産業は親会社（アメリカ石油メジャー）の開発する中近東の原油をガルフ価格で安価に且つ大量に輸入し、精製することで国内炭の価格を下廻る石油価格（重油）でエネルギー市場を掌握するのである。このことで、エネルギー革命は、石炭から石油への転換となり、石炭鉱業のスクラップ&ビルドに拍車をかけ、石炭政策の保護の下に石炭鉱業の生存を育くむのである。この結果、三菱鉱業、三井石炭鉱業そして住友石炭等が石炭鉱業から撤退を進め、多角化政策の下に企業集団を形成しようとするが、北炭は逆に石炭鉱業に^{とど}まり、むしろその中で生産力拡充を計ろうとする特異な歩みを試みるのである。その中で、北野潔は、北炭の最後の砦として開坑される北炭夕張新鉱へ移り、後半の人生を全て夕張新鉱の開発とその発展に捧げるのである。すなわち、北野潔は昭和 48 年 11 月夕張新鉱開発課開発主任に就くや、西区域の採炭現場の準備に取りかかり、ガス抜きを重点に全力を注ぐのである。というのも、夕張新鉱は清水沢、平和、そして真谷地炭鉱の間に挟まれる地下 700 M^{メートル}からの深部開発で、ガス山の呼び方をされている危険な炭鉱だからである。北野潔は夕張新鉱のガス山としての特異性と深部開発による地圧の高さからくる突出ガスへの危険と天盤・天井崩落に会いながら 5,000 トン体制に取り組むが、現場でのこうした新山として取り組む北野潔の修羅場はまさに北炭百年史の一面を^{えぐ}抉る場面である。

だが、昭和 50 年 11 月に北炭職員組合（夕張）の副委員長に就任するが、北野潔は幌内炭鉱ガス爆発の救助と再建に取り組む。北野潔は再建案として空知、真谷地、そして、昭和 54 年夕張炭鉱の分社問題に取り組み、その解決を見た中で、運命の昭和 56 年 10 月 16 日夕張新鉱のガス突出爆発に合うのである。この夕張新鉱のガス突出災害は一挙に北炭とその三分社のグループを吹き飛ばし、北炭の経営破綻へ帰結することになるのである。北野潔は北炭百年史の総まとめの舞台で北炭職員組合（夕張）委員長として最後の任務を終えるのである。まさに、北野潔は北炭百年史の終りの幕を降ろす歴史現場に立ち会い、林千明社長と共に手を握り合いながら北炭社の会社更生法に向けて最後の努力を尽すが、矢折れ、^{かたな}刀つきるのである。したがって、北野潔は北炭百年史の終りを見とどける最後の生き証人の一人となったのである。

目 次

第一編	北海道炭鉱汽船(株)夕張鉱業所の発達
一章	入社と復興時代（夕張二鉱一区時代）
二章	自立期夕張二鉱の採炭機械導入過程
(一)	昭和 28 年 63 日ストライキと合理化闘争
(二)	労働災害と保安対策
三章	高度経済成長期夕張一鉱時代（S.33.1～48.11）
(一)	社員へ登用
(二)	昭和 40 年ガス爆発と深部開発
(三)	石炭政策のスクラップ&ビルド
(四)	北炭夕張地区の再編成と夕張新鉱構想
第二編	北海道炭鉱汽船(株)夕張新鉱時代
一章	夕張新鉱開発課時代
二章	組合専従時代
(一)	昭和 50 年幌内炭鉱ガス爆発と再建問題
(二)	夕張地区の閉山ラッシュと夕張新鉱への統合過程
(三)	修正再建計画策定までの経緯
三章	北炭職員組合の再編と解体
(一)	修正再建計画の決定と新会社発足
(二)	北炭職員組合の解体と新組織（協議会）の設立
(三)	北海道炭鉱汽船(株)の危機とその背景
四章	分社后夕張職員組合時代
(一)	夕張新鉱と職員組合の交渉問題
(二)	夕張新鉱南排气斜坑自然発火と対策
(三)	新再建整備計画認定
五章	夕張新鉱ガス突出の発生と職員組合（夕張）の解散
(一)	昭和 56 年 10 月 16 日夕張新鉱ガス突出災害
(二)	夕張新鉱ガス突出と再建問題の経緯
(三)	夕張新鉱閉山と北炭職員組合（夕張）の解散

第一編 北海道炭鉱汽船(株)夕張鉱業所の発達

一章 入社と復興時代（夕張二鉱一区時代）

夕張二鉱一区時代（S 21.5～S 33.1）

昭和 21 年 5 月の採用と言え、華人、朝鮮等所謂戦勝国の労働者が、長い間の被支配的立場から開放され、そのうっぶんを爆発させて、至るところで騒擾を惹起し不法事件が相次いだ頃である。

米進駐軍がこれらの騒擾の鎮静化に努め昭和 21 年 1 月初旬までに外地人労働者の離山と帰国を完了させ数ヶ月を経た時期であったので、治安の回復はみたものの坑内は、戦時増産の強行により荒廃を極めていた。したがって、坑内状況の生産の回復を見るためには、坑道の維持、

石堀進切羽の整備等が必須条件であるにも抱わらず、前記外地人労働者の送還は、半面において労働力の一大損耗を意味するものであった。このため政府としても戦後の復興対策として、労働者の充足を最重点に掲げて取組んだ結果、除々に整備されて来たと思われ、当時特別悪い坑内条件でなかった様に記憶する。

只労働力は補充されたものの、熟練労働者、所謂先山不足と共にベルト等資材の老朽化も災いして、仲々出炭量の回復に繋がらなかったのではなかったか。

当時小生も採炭夫として採用され、幾日かして切羽の人間も少しづつ判って来たが、個々人の略歴も多彩を極め、背中とか腕に「刺青」の兄さん方が多かった。それも半端に彫って、何かにつけて「イキ」がって二言目には、「スコップの裏表を見せてやる」と啖呵を切るのはよいが、一寸指を傷つけて出血を見ると、貧血をおこして倒れると言った有様で、若かった吾々としては良く馬鹿にして、からかったものである。従ってその労働力も知れたものであった。その証拠に、小生も3ヶ月目に、ピックを持って先山養成に入ったものである。経験上から一級先山となるのには、先山になってから3年乃至5年以内に、そのレベルに達しなければ大先山になる素質はないと云われていた。斯様に補充された労働力も、終戦後の引揚者、東北の農家の二三男等、緊急避難の意味で流入した者が多かったため、国内が終戦の混乱から落着くにつれ食糧事情も安定の兆しを見せるや、これ等の人達は次第に離山傾向となったが、熟練労働者も夫々育成され、若年層が主力となるに及んで地力は次第について来た。入社後23年の春、社員登用試験を受けれと言われ軽い気持で一次試験に臨んだが、幸いにして採鉱関係数名の一次合格者の中に入り、二次の面接試験の最中、試験官より受験資格のない者が何故受験したとして、こっぴどく叱られ（なんでも3年以上の経験がなくては資格がなかった様であった）その儘会場から退散した記憶も今となっては懐かしい思い出となった。

その頃、生産委員をやれと言われ、民主的に選挙と言う事もなく夕張鉱業所二鉱一区の生産委員となった。生産委員は当時各区から1名づつ選出され、毎月開催される生産委員会の場で、各区各切羽の採炭夫1人当りの採掘基準量を決定した。その為に生産委員は各区の切羽へ調査に入り切羽条件を見て二鉱全体の出炭基準量を各区の切羽に割当てて役割を果たしていた。従って夫々の採炭現場の利益代表となっていたので、時には難航して1日で出炭基準量を決定出来なかった事も屢々あった。

斯様な方式では例え切羽条件が良好であっても一定の能率に止めることになった。かくて鉱夫は、如何にして楽に平均的な収入を得るかと言う事に汲々として、切羽の能力発揮と言う面では、阻害要因となって、二鉱全体の出炭向上に繋がらなかった。戦後の復興は石炭と鉄鋼の増産との至上命令に応える傾斜生産方式を導入した。現場での対応は時々の大採炭と稱した、一時的な労働強化に終始し、民主化の波の中で恒例化した労働争議と相俟って、実効は期し難いものであった。そうこうしている中に、採掘区域もだんだん奥部に移行していった。このため二鉱の採炭現場では地層的に6・8尺と10尺層の間に合磐が肥厚し出炭を困難にした。すなわち、10尺層ロングでは跡山のバレ状況が悪くなり、盤圧のため屢々ロング面の80%位の崩落

が相次いで起り技術的な問題として解決を迫られた。対策として、末口 30 cm 程度の落葉材を面ベルトの跡山側に、面切り打柱として、5 M^{メートル}置きに打柱を施したが、盤圧が掛かると崩壊してしまって効果がなく、度重なると声を掛合って退避するのに混雑するので、黙って逃げる有様で、保安上も由々しき問題となった。この為検討して空木組の井桁の片側を 30 K^{キロ}のレールとし片側を鉄道で使用する枕木材としてクサビで絞上げて当付けをする始末であった。この空木組は私の跡山側多分 5 M^{メートル}間隔位に設置した。この結果私の崩落は避けられ、保安上も安心して働ける環境を作ることが出来たので安堵の胸を撫でたものであった。

個々の切羽では、発生する自然条件の克服に力を注いだが、これを併行して坑道の整備が重要であった。このため、坑道さえ整備されると自然に出炭も出るとして、坑道支持の新技术としてモル杵を導入、試験の為、採炭が終わってから仲間と語らって上添に何杵か施杵したのも昭和 24 年頃であった。次いで、機械化の方向として、鉄柱が導入された。この結果、木梁鉄柱の併用採炭が画期的な事象となった。その頃 GHQ の通告及び炭鉱特別調査団の勧告等があつて、炭鉱全体の問題として兼々対策について、吾々にも当時副部長兼第 2 鉱々長であった大溝友吉重役から、「減炭の最大原因は、如何にしたら出炭増に繋がるか」と諮問された。それに対して、私は率直に「最大原因はストライキ、寮生スト等に見られるサボタージュと思うが、然し採炭夫自体はそこまで落込んでいない。そこで皆んなに意欲を持たすためにも、標準作業量の基準を下げて、能率給を上げ、賃上げで給与所得を多く取らせてはどうか」と申し上げた。大溝友吉鉱長は暫らく考えて「これは私の首を賭けた問題となる。一日二日考えさせてくれ」と答えたが、今振り返ってみると当時 22~23 歳の青二才がよく大胆に意見を述べたと思うし、それを真摯な態度で受止められた大溝友吉重役も立派であったが、汗顔の至りである。

数日して、出坑時呼ばれて鉱長室に伺ったところ「君の意見に従う、私としても首を賭けて取組むので悔いのない様協力してくれ」との返事であった。私は身の引緊まる思いで、仲間の生産委員宅を訪問し、経過と鉱長の真意を伝えて、熱意に応えるべく健闘を誓い合ったものであった。

実施に移されたのは定かでないが、結果的には、飛躍的な出炭上昇を見て、労働者には喜ばれ、会社の生産維持、計画出炭の達成に寄与出来たと感謝をしている。

一方労働争議も終戦後の混乱、インフレ克服のための闘争から労働協約の締結等で一段落し、この頃は地域闘争に発展したのが特徴だったのではないと思われる。山猫スト或は職場に於けるサボタージュを指導するのが、共産党員と組合幹部であつて、馴れ合いと言う風潮が急激に蔓延し、その暗躍が活潑となった時代であった。山猫ストと呼ばれた寮生ストに象徴される様に、労働組合も事態收拾の責を負って二度解散したりして、夕張の炭鉱は揺れに揺れた。

今にして回顧すると、伝統的な愛社精神が鉱員、係員の中に保持されていた。この結果、共産党のイデオロギー云々ではなくして、職場で不真面目な人間が何を言うか、或いは生産保安妨害に類する行為は絶対許さないと、また、労働運動の行過ぎや彼等が職場で申し上るのを、これら愛社精神の若手グループで、徹底的に阻止したものであり、二鉱一区の風習と言う

か、先輩諸氏が培かって来た愛社精神が伝統的に受継がれて良い方向に流れて行った結果であると思われた。後で判った事だが彼等は職場に居難らくなって、清水沢鉱に流れて行ったようである。

その頃、反共愛山同志会が結成され、最初は岩切労務課長が統轄されていた。メンバーとしては、各区の特選労務者を含む吾々若手も参加したが、まさに共産党の基地と化した感のあった夕張の炭鉱を守れと言う運動であったと思う。

前後して解雇及び、坑内外比率 6 : 4 の構成比率とする配置転換が実施され、一応小康を得た。

そして 25 年に入って、朝鮮動乱の勃発を機に、GHQ の労働政策の一大転換をもたらし、特筆すべき昭和 25 年 10 月 15 日レットパージ旋風が吹き荒れた。

第二章 自立期夕張二鉱の採炭機械導入過程

25 年 10 月、二鉱一区で、初めてカッペが導入される事となり、若手拾数名が編成され、70 M^{メートル}位の試験切羽が設定された、運搬機は V 型トラフを使用し、他方炭層は、若干揉めて 6・8 尺層の採掘であった。既に木梁り鉄柱を使用していたので、抵抗なくカッペ使用に馴れ、寧ろ作業がし易くなり、この結果、ピック 1 台当り 10 M^{メートル}の採炭掘進を記録した様に記憶する。

作業システムが、従来は帯状充填であったのが、総ばらし採炭となったので、鉄柱カッペの回収作業が付加する一方一サイクルの作業が標準化された。さらに、跡山のバレ処理が問題となった。当初は跡山のバレに注意が奪われ自分の足元にバレ群が流れて足が埋まる迄気付かず、助け出されると言う事が相次ぎ、笑い種となったが、その後バレ群防止に竹を網んだ簀の子が採用され、この問題は解決された。新採炭方式と言う事もあり、一方一サイクルが終るまで、時間に抱わらず、一番方で、6 時出坑が度々あったと記憶する。若いと言う事が、画期的な採炭法をマスターすると言う気力にも繋がり今では考えられない思い出でもある。切羽全体の能率が 13 M³/人迄あがり、この一方一サイクルによる作業の確立は当時としては画期的なものであった。

この切羽で試験操業をし、その結果が良好なので鉄柱は坑内支柱の中心となり、夕張鉱業所二鉱全体に採用された。同時に深部開発も可能にされ、第四区域に進出するが、第四区域に於ては鉄柱に採炭機カッペを組合わせる段階に達した。兪ター区全体でカッペ採炭切羽を設定し本格稼働を開始し、北炭は鉄柱カッペの採炭時代を迎えた。

第四ロングの切羽仕様は、ロング面長 100m 平均、傾斜 7-8°、炭丈 2.40 M^{メートル} ~ 2.50 M^{メートル} であり、そして運搬機は大型の V 型トラフのチェーンコンベアーであったがベルトに積込むのとは大差があり喜ばれたものであった。只加背が高く立柱には馴れるまで 3 人掛りで石炭をベルトに積込む緊急作業を行った。

この切羽の問題点としては倒炭等による大塊を如何にコンベアーの運転を停止しないで炭割

りをするかである。塊炭を割るため、朝の1時間半位で切羽出炭の85%程度が運び出されるが、このピーク時に過負荷を生ぜしめると故障続出で一方一サイクルの消化に重大な影響を及ぼす。このため、ロング長若しくは指導員と他に4名位が1時間早出をして切羽の準備作業後、運転手が来る迄の間、切羽と坑内漏斗口のベルトの運転を掛け、採炭夫が番割りを受け切羽に入って漸次採炭した炭が運び出される様にし、スムーズな作業遂行に心掛けたものであった。

斯様に着実に採掘法の改革（一方一サイクル）に歩み始めたものの、炭壁の倒壊防止対策及び、カップ先端の支持率が1.20 M^{メートル}カップで0.3トンの出炭と言う事で、カップのコッターピンの強度が問題になった。と同時に、採炭切羽では直接天磐の支持と言う面ではカップ延長だけでは全く支持力0^{ゼロ}と同じだと言う観念を徹底して採炭現場の仲間に植付けることにより、油断によるガス洩れ或は崩落等の不測の事態及び、負傷の防止等による通常出炭の平均的確保ひいては賃金も安定すると言う事で自主的に、自分の採掘時間に前立柱を何本以上施すという自主規制で対策したものであった。

そして、機械化採炭はウェストファリヤ製 WDCC の導入、Wジブコールカッターの併用による採炭へ発展していったが、当時はケーブルハンドラーもなかった。このためカッターを切上げるのに吾々8名は一番方早出の5時入坑して切截につれて人力でケーブルを引張り上げたが、居眠りしつゝ頑張ったものである。ケーブルは解決をみたが、次にロング切羽のコール・カッターの問題が生じた。すなわち、切截につれ直天と炭との剝離によるカッターのジブ面への炭層の圧迫加速により屢々ジブが回転不良を起こした。この対策として切截後より逐次、ジブの刃の空間に研若しくは木材の切れ端しを突込んで、ジブのとられるのを防止したが、この一時処理は今考えると何んのためのコールカッターかと笑われそうだが当時はそれでも、ピックによる採掘と較べてコール・カッターはとても容易に採炭出来、採炭現場で喜ばれたものであった。

然し究極は2方連続採炭の実現である。この段階では、カッター切截後、コール・カッター本体を深側に移動（上下切截出来ない）させるのが又大仕事で、DCC^{ダブル・コンベヤー・チェーン}のスクレーパーに緊急に締め付け運転を掛け乍らカッターを下げたが、2度程ロング面の小さな馬背部分を乗越える際、控のロープが外れ逸走させることが何度か生じた。幸い事故はなかったが、冷汗をかいたりし乍ら連続採炭を試みたが、時間的に余裕がなく一方採炭に終始したもののカップ採炭は全鉱に普及した。このことからカップ採炭による標準作業量の設定と科学的管理法の導入が提起されたのも、この時期である（昭和26年）。

丁度企業としては「石炭企業合理化運動」が始まり、北炭では天塩坑の閉山等、赤字炭鉱の整理が行われた時期であったが、労働組合としても、操作問題には、前向きに取組み、翌27年にかけて鋭意交渉が持たれた。私は生産委員としてオブザーバーで交渉に臨席したが、具体的には、工数換算方式が趣旨であり明治大正生れの炭山男に、この方式をどう判り易い様に説明理解させたらよいかと苦心した。現場ではこの様に合理化を伴いながら増産の方向に進んだが、一時は朝鮮動乱の特需景気を受けて好況を盛返したかに見えた。石炭事情も27年春頃より過剰

生産気味となり、特筆すべき 63 日の長期ストで解消するかに見えた。しかし、貯炭も動乱の終結、昭和 28 年に入っては増加した。国会では公共の福祉に反するとして電力と炭鉱に対する「スト規制法」が成立し安定するかに見えた労使関係も一転して合理化を巡って対立を深めた。会社側は、異常貯炭を抱え炭価の値引き、借入金 (101 億円) の赤字を理由に、企業整備等による再建計画案を提示し、希望退職募集ならびに配置転換を発表した。

労働組合は全面的に反対して闘ったが、炭界の傾き等かげりが見え始め、他産業の好況も反映してか、意外にも応募者の続出をみたので、遂に“自己都合退職者は認めよう”と、戦術転換して妥結を見た。周りの友人も数名室蘭製鉄所関係に去ったのもこの機会であった。遡ってその年の暮れ、炭鉱労働者が自分の金を出し合って作った映画「女一人大地に行く」が完成し、山田五十鈴、宇野重吉、岸旗江等が来夕し本格的にクランクインした。このため、組合は勿論、演劇音楽サークルの面々が積極的に協力し、俳優の面々も組合員の家庭に寝どまりして、45 日間のロケを敢行して完成させたのである。この映画に対しては無味乾燥、暗い坑内生活の中にあって、いくらかでも文化的に潤いを求めた、僅かな願いも一連の闘いの中で潰^{ついで}れる思いで忘れられない一瞬の記憶、感慨でもあった。

(一) 昭和 28 年 63 日ストライキと合理化闘争

先の 63 日ストは、マーケットバスケット方式と呼ばれる理論をふりかざしての賃金要求の闘いであったが、労働者の犠牲も多大であった事から 28 年秋の賃闘では全面ストと同様な効果を狙った“原炭搬出拒否”という戦術で闘ったが、他方会社は賃金カットで対抗して来た。

賃金闘争は熾烈化し長期の様相を呈して来たところから、中労委が斡旋に乗り出す等の事態となったものの“炭労はこれを受けることは、連盟が自主的に解決することを放棄し解決が長引く”という見解から、これを拒否し、3 月 7 日延 15 日に亘る部分ストを決行した。この結果、自主解決を見た (600 円の up、1 時金 1,000 円平均 3,100 円の貸付け) が、会社も筋を通して賃金カットの実施に踏み切った。

幾多のストを通じて、幾つかの問題が労使間で生じた。すなわち、坑道の修繕等の促進改善は見られるものの、(1)切羽の悪化等ストのつけは採炭夫に転化されることとなり、また(2)自分達がストライキを決行して、貸付け金を会社に要求するのはあまりに卑屈すぎはしないかという問題である。

労働者と雖ども人間だ、正々堂々と対処すべきだと現場サイドとして不満な意見が出始めたのもこの頃であったと思うし、又自分達の生活は自分達で守ろうと生活協同組合が発足したのもこの直後であった。

昭和 30 年懸案の「珪肺法」が制定され、職業病対策の第 1 歩をしるす画期的意義をもつものであった。4 月暫定措置を協定し、全鉱健康診断が実施された。第一次に続いて凝義のある者には第二次の検査を実施し、小生も二次の通知が来て、鉱業所に於て精密検査を受けたものの、一度侵されると悪化しても決してよくならないと言われ、真剣そのものの態度であった。結果

第1症度と通知を受けたが、初めてのことで、自覚症状もない儘、どの程度の速度で病状が進行するのか判らず、又人によっても夫々反応が違ふということで、因果な職業を選んだものと、一抹の不安は隠し切れないものがあつた。

昭和31年は神武以来の好景気といわれた年でもあつた。政治情勢では自社二大政党の様相化を見せ対決姿勢が顕著であつた。この年の参院選では、夕炭労出身の大矢正候補が初出馬にもかかわらず悠々上位当選を果した。地方選でも初めて夕炭労統一候補を抱え、確か8名当選の偉業を果し政治局を擁して、市制に重要な役割りを演じたと言える。この時社光1区の住人となり、川口市議候補を応援し無事当選させたものの、反対派のタレ込みに会い当選候補は逮捕され留置され、何の容疑か連絡もつかず、選挙事務所も混乱したが、吾々も参考人として取調べを受け全貌が明らかになるにつけ、反対派の策謀であつた事が判り、選挙というものを改めて見直した思いで、職場でも明らかな抗争はなかつたものの、人間関係に波及したのも事実であつた。結果は無罪で釈放され、事なきを得た。

この年の賃闘は度重なる運搬ストライキにより生産の麻痺となり、企業の経営基盤も揺ぎかねない経緯もあつて、大手8社は戦後はじめて、ロックアウトという強硬手段により対抗した。3月19日以降、中労委として二次にわたつて斡旋案を示したため、4月2日解決を見た。

(二) 労働災害と保安対策

従来1.2 M^{メートル} カップを使用して漸らく続いたが、会社より1.3 M^{メートル} の使用について試作品を導入し使用したいとの申入れがなされ、昨年よりの懸案事項となつてゐた。この時は既に私は生産委員も譲つていたので、詳しい経過は判らないが、試験の結果では、直接天磐の維持のポイントは、カップ先であり、これを10 cm 余分に支持出来るのは、保安上では、保安度が高く効果的ではあるが使用の際、1.2 カップより重く、又長い分だけ採炭する上で、労働強化になるという事であつた。このため、労働組合は辛労度と出炭増加に伴う条件闘争を行い、会社より重量を1.2 カップと同重量にして辛労度を軽減する対策を取らせた。その上、労働組合は手当についても若干の提案がなされたので条件闘争に終止符をうったのである。この協定は8月末に確認されたので、以後1.3 M^{メートル} カップが普及して主力となつた。察するに、この事は単に保安上の効果とは別に、原料炭の急増は驚異的なものがあつて、ガス鉄鋼関係の活況により、長期販売契約の締結等当社原料炭の安定供給の確保を必然たらしむる意図があつたものと思われる。

三章 高度経済成長期夕張一鉱時代 (S.33.1~48.11)

(一) 社員へ登用

社員登用制度の協定が取交わされた昨年第1回の試験が実施され、1月25日付で夕張地区から、一鉱4名、二鉱3名、鉱業所1名、清水沢2名、電力所2名、計12名(内採鉱6名)が登

用になって、鉱業所で教育を受ける事になった。辞令には本給1万160円とあり小生の前職では3万6,000円位の総収入であり格段の差が生じた。

初めての制度であり会社の熱意も相当なものであり、北炭会社の集合教育で1堂に会して見ると錚々たる前歴を持つ人物が多く一番年下の吾々とは、格段の差があったのではなかろうか。

教育は全体の集合教育が2度程もたれ、主として鉱業所単位の教育で、補導課長とマンツーマンの教育の様に密度の高い教育を受けられたと思っている。電力所の2名は間もなく北炭化成(埼玉県戸田市)へ転勤になった。残り10名は年輩の坂本氏を親分として(45歳)一致団結、整然と行動をした。教育期間は2年間で鉱業所では9ヶ月に及んだが、係員としての実務基礎知識では徹底的な討論を行い、夫々勤続10年以上の経験を持つだけに、実に稔りのある充実した期間であった。

10月8日、仮配属され、小生は電気菱沼氏と共に一鉱の勤務となった。

教育期間とは名ばかりで、即第一線勤務を命じられたが同じ夕張鉱業所と言っても、採炭は一鉱と二鉱同じ発破併用採炭であり、他方運搬ベルトも坑内ポケット迄で、総て二鉱のミニチュアであった。

一鉱で良かった点は次の3点に要約される。

①コンパクトであるが、坑内から坑外の扇風機まで、停電その他の事故があると運転開始に伴う保安上の立会等本来保安係員の職責を幅広く勉強する事にもなり片端な係員に育たないと言うのが強みであったと思う。

②配属になった最上区の当該係長が素晴らしい上司であり、非常に恵まれた第1歩を踏出せた事である。

作業の計画から立案まで、緻密な工程を駆使して出来上って居り、目的から作業の成就の急所まで、また使用資材の全般に亘って、きめ細かに、「作業操作指針」と言うものが配布され一目で判る様になっている。これを受けてこの作業に関わる欄の連絡緊密化等夫々の立場で事前協議をし、特別な事がない限り、連携プレーが悪くて作業に影響したと言う事はなく後年自然に身について、どれだけ助かったか判らない。今でもこの「作業操作指針」は係員としての座右の銘の如く大切に保管している。

③配属になって、二鉱育ちで、当然作業のシステム及び習慣等異なった環境に入ってきたので、何かにつけて白い眼で見られ勝ちで、何方かと言うと一匹狼な存在で、右せず左せずで終始したと思う。鉱員との関係では「人には必ず長所がある。良い所を見出して延ばすこと」に徹した。

係員としては与えられた人材を最大限に活用して職責を果たすことに心掛けた。御蔭でコミュニケーションは一鉱時代を通じて、一生の思い出に残る素晴らしいものであったと自負出来る。

この様に部下の協力もあり、小生自身、採炭出身で見習社員時代に一切羽を受持って生産に携さわり大いに張切って一鉱の係員時代を過した。

炭層区域は最上人車斜坑を境いにして区分され、左部内右部内と言っていたが、左部内は直接天盤も比較的硬く好条件で6, 8, 10 尺と炭層が接近して、40 年頃迄は捨炭が盛んに行われ、採炭コストには見るべきものがあつた様だ。甚しい時には新面切羽は二の次にして捨炭で出炭するよき時代もあつたが、右部内は擾乱地帯が主力で直接天磐が一定せず、このため極めて自然発火の起き易い炭層区域であつた。

一鉱配属以来、右部内の切羽では、昭和 40 年の爆発迄、最後の終掘により鉄柱カッペの撤収迄出来たロングは 2 切羽を数えるのみであつた。しかもこの 2 切羽はガス突出何等かの兆候或いは自然発火による早期密閉の措置を蒙つた切羽ばかりであつた。

(二) 昭和 40 年ガス爆発と深部開発

40 年の爆発により一鉱は深部開発に着手し、43 年春より出炭したが、最大の特徴は、上添ゲード側に従来の粘土丸太充填を廃止し FA (フライアッシュ) の流送充填を行った事であつた。失敗は幾度か重ねたがこの事により上添坑道のガス量が常に一定化し、以来切羽での自然発火事故は皆無となり、保安上多大の進歩を遂げたと言える。

これに先立って 40 年の爆発時、救護隊活動後、殉職者の報告書等の書類整理等の余暇を縫って「1 体どの位の負圧差で自然発火が起きるのか」をテーマとして調査研究を行った。その結論として、上添ゲード坑道の負圧の差が、20 mm 以内なら先づ大丈夫だろうと言う事になり以来休日の保安巡検等では、基礎知識として調査し坑道の修繕、通気圧に留意して来た。

保安的には、予防保安に徹する姿勢、或いは「自分の身は自分で守る」と言う保安思想が浸透し始め高まりを見せつゝあつたが、第三次石炭政策では、負債の一千億円を国が肩代りして、出炭規模を 5,000 万トンに押え、そして 1,000 万トンの閉山と、35,000 人の炭鉱労働者を整理するという、スクラップアンドビルド政策を決定した。このため、道内では、豊里炭鉱をはじめとして、夕張の旭炭鉱等 12 の中小炭鉱が閉山スクラップ化に雪崩れこんだ。

(三) 石炭政策のスクラップ&ビルド

この豊里炭鉱の閉山反対闘争は熾烈を極め、明日は吾身と大挙動員団を繰出して「失業反対、炭鉱労働者と産炭地を守る」一大運動を展開した。

豊里の闘いでは「拝啓、総理大臣さま」に始まって切々と綴った香河菊枝ちゃんの手紙が報道され心ある多くの人々の胸をしめつけた。その後 1 日内閣で札幌に来られた佐藤栄作首相は、お父さんと一緒に参加した菊枝ちゃんに、「確約は出来ないが当分は大丈夫です」と太鼓判を押した、と伝わって安堵したが数ヶ月後、悲しみの閉山でヤマの歴史に幕を降したのであつた。これに先立って 38 年の三池爆発の CO 中毒後遺症になやむ患者の家族とその主婦の坑底入り込みによる抗議或いは全国的に続発して跡を断たない災害、そして今回の閉山スクラップ化の波、この様な政情の中で、炭鉱に希望を失って離職者が増加して行き生き残るためには更に合理化と能率の向上の使命が課せられ、「去るも地獄残るも地獄」と言う言葉がかわされ、曾って

の仲間も石炭不況の中で吾々を置いて去るのだから……との心の葛藤があつて揺れ動いたものである。

それは、炭鉱における熟練労働者への育成システムは先山制のもとで行なわれてきた。近年間接部門及び直接部門の機械化によって先山制は崩れてきており（個人の持単価に大きな差異がなくなりつゝありし）、稼働グループと先山教育システムは大幅に変容してきている。本来会社が行うべき技術教育も、これに占める割合は極めて少いと言えるのでなかろうか。先山はコール・カッター或いはドラム・カッターのオペレーターとして教育され、先山―後山の従来関係を失うのである。結局、鉱員層は集団労働を通しての自分の体験で学んできたのであり、坑内において集団労働の果している役割は大きい。それだけに上述した様に去る者に対しての不信感も又大きかったと言える。そして昭和44年、第四次石炭政策がスタートしたのが4月からで、原料炭中心の少数精鋭の方向が打出されたため、中小一般炭のヤマの閉山があいついで、“なだれ閉山の急現象”をみせた。その中で、原料炭中心の北炭は他炭鉱会社に対して優位な地位にあり、夕張新鉱の開坑を中心に生産力拡充を計る。他方三菱鉱業、住友石炭は炭鉱から撤退を図り、対照的な展開となる。

（四）北炭夕張地区の再編成と夕張新鉱構想

こうした石炭情勢の中で、“石炭のマチ”夕張も北炭五山と三菱大夕張、そして出炭間近い南大夕張、そして、中小三炭鉱のみとなって、それに加え炭鉱労働者の不足で稼働体制の定まらない悩みがあった。吾々現場サイドとしても、補完する意味において例えば採炭夫と雖ども掘進拡大運搬などの職種でもこなせる様教育経験を積ませ、事ある時に対処出来る体制を着々と整えつゝあった。後年新鉱移行後もこれがどの位役立ったか計り知れないものがあったと思う。

職員も道内、雄別・明治・北星炭鉱等の閉山により充足があり、坑道の深部化に対応出来る体制が労働力の面では打開出来るかと思われたが、45年5月、北炭特別労使協議会の席上、夕張新鉱開発計画に関連して、夕張二鉱、平和、清水沢を閉山し、各々新鉱に移行することを中心とする合理化案が提出され、各山元では様々な反応を示した。一方夕張の街は、まさに“寝耳に水”の北炭ショックであつた。夕張市の総合開発計画案が根底からくつがえされ、夕張鉄道の旅客列車の全廃提案も、夕鉄内部の問題にとどまらず、全市民の足でもあるだけに、全市的な論議のマトとなってひろがった。波紋は更に拡がり学校統廃合問題がふり出しにもどされた。また更に深刻なのは、炭鉱労働者の流出であつた。この閉山提案で再び離山ムードに拍車が掛けられ、ヤマに見切りをつけて離山する鉱員は跡をたゞず、合理化発表後の5ヶ月間で605名もやめた。毎月100人以上の離山で、北炭ショックは内外に長く尾を引く後遺症となったのである。

夕張では、二鉱の閉山と新二鉱（下層）開発移行の準備が着々と進められ、若干の社員人事の異動もあり、期待されたが、46年1月に至り二鉱の経済実収出炭が困難との見通しがはっきりしたので、下層への移行を半年早めると発表された。

北炭ショックの動揺がおさまらぬ内に、然もヤマ元の夕張炭鉱，労働組合も一切知らされていない“寝耳に水”の驚きで夕張全体を再びゆり動かしした。

このような暗雲たちこめる情勢の中であって、45年10月、夕張のヤマにも、3DK住宅がおめみえして、炭住のイメージが一新され、ヤマの話題をさらった。炭住というと長屋という言葉がピッタリしたが、この3DK住宅の外装はクリーム色の耐火材でかためられ、部屋の内部は化粧ベニヤで落着いた感じのもので、特にダイニングキッチンはステンレス製の流し台が据付けられ、主婦達的话题を呼んだものだが、所詮、打続く合理化不況の中では、道路が良くなるとか、建物が新らしくなると必ず閉山があるとして、二鉱閉山に伴って、新二鉱と一鉱の増強計画があるとは知らされても、人々は半信半疑で、率直には喜べない心境であった。

一鉱では骨格坑道の整備で増強計画に対処していたが、炭層も傾斜30°以内で安定すれば、当時羽幌炭鉱，住友奔別で使用していた三菱ガーリック社製の自走枠の使用もあり得るとして、石炭事業団主催の講習会に、北炭から2名（小生と平和鉱から1名）出席する機会を得た。私は自走枠が導入されたら絶対成功させて見せると決意も新たに出席したものの、第1時間目から三菱重工の来島技師の講義で本体がどの様なものか現物にも御目に掛ったことがなく、しかも講義内容は機械工学を中心とすることからチンプンカンプンである。これではならじと、私は一言一句、聞逃がすまいと集中するが筆記専門早3日目の研修日が過ぎて仕舞い、この調子で果して、マスターして現場に帰って係員を始め鉱員を指導出来るか不安で1杯であったが、私は4日目より自走枠に直接々する様になって、実習段階に入ると、今迄のノートに筆記したのが、幸いして、霧が晴れる様に理解の度合いが高まって、何かしら自信がついて来た。自分で実際に操作して一通りは理解も出来楽しくなって来た。一週目の午後試験を済ませ、夜行列車で羽幌炭鉱本坑の実習地に向った。列車の中で付添の事業団の職員から、試験の結果について「北炭の2人だけ100点だが、優秀な人間を選抜して出席させたのだろう」……と批判めいた発言があったが、この職員は住友出身の派遣された人であり、現地で既に導入稼働して居る現場の講習生が、成績がよくなかったらしく、この事は馴れによる油断であって、吾々は40歳を過ぎて、頭の固くなった人間で、決して優秀でないがこれから自分達で使って成功させるんだとの気魄の差がしからしめる事だと割切って接した。羽幌炭鉱では、築別の閉山撤退のニュースが伝わっての直後でもあり、揺れ動いている最中に御邪魔したが、休日にも拘わらず、ホーベルを稼働させて自走枠の枠出し実習をしたが、原理を理解し手順を確実に守ると以外に早くマスター出来得るとものと判断し、実際にヤマに帰って切羽の実態に照して自走枠の操作をしている錯覚すら覚えた。

羽幌炭鉱での3日間の印象は次の3点を体験したことであった。

1) 労務管理の徹底と厳格さ

徹底していると言うか、労務連絡所では他所者と思うと「何処から来た、何んの目的で」と詰問口調で、吾々は先づ吃驚したこと。又夜の街も山の中であることから、飲屋も五軒程しかなく10時になると労務の方達が現われ帰って寝る様指示され、会社の方針が街にまで徹底して

いて昔のタコ部屋を一瞬想像させたものである。これではたまらんと、一行13名は、次の日は自粛して宿舎で軽くやりましょと夕食をはさんで飲んだが、夜7時になっても音を上げていると、女中さんに気合を掛けられ、乱れて酒のこぼしたのを見とがめられると「それほどまでになっても飲むとは何事ぞ」と、又々御説教、吃驚するやら、感心するやら、新入社員教育も此処に御願ひして1ヶ月位教育を受けるのも、意義があると思った。

又感心したのは、それだけ介入するが、鉱員を大切にするという基本方針があったのか、風呂から上ると、当時ボマード、櫛、クリームが備付けられて誰でも自由に利用出来る様になっていたし、坑務所には、夏の暑い時でも冷却水が飲める様に設備されていたり、吾々のヤマより一歩進んだ感覚で対応されていた事である。

2) 中小炭鉱における労使関係の良さ。この炭鉱ではラインだろうが、スタッフだろうと、夫々責任と権限が与えられていて、例えば、この時期自走柵の導入は社運を掛けて実施したことと思うが、一自走柵の主任が、稼働段階で改造したいと感ずると躊躇する事なく敢然と実行に移すのである。(勿論上司に報告はすると思うが)この炭鉱ではそれだけ実状の好転が早く望まれ好結果を生むであろうと…察せられた点である。組織が大きくなると仲々決裁までに時間を要し思う様に^{はかど}涉らないものであり羨ましくも感ぜられた。権限の委譲、そしてそれに^た堪えうる部下の育成教育は自然を相手の闘いの連続でありその時々^の事象に適確に対処するために、特に大切な事と痛感しているだけに強烈な印象を受けた。

3) 坑内管理の良さ

立坑を下って先づ感じた事は、坑内の湿度が非常に少ないという事、さらに湧水は全く見受けられず、ポンプは湿式ボーリングのために使用するのみ、乾燥期には立坑で噴霧をするとの事であった。

他方最大の弱点は、機械採炭で進行が速いにかゝらず稼行炭層が一層よくない状況にあることである。炭層切羽は上下盤が比較的軟弱で盤膨れが激しく如何に盤打ち拡大が採炭に追付いて支障のない様に出来るかがポイントでそのため間接費が以外とコストにハネ返るのではないだろうかという点である。

以上10日間に亘る講習見学を終え、夫々健闘を誓い合ってヤマに帰っていった。

ヤマに帰ると、最上立入坑道という基幹坑道が崩壊して、旧坑に通じ取明けもままならず、勿論臨時休業で復旧作業を急いでいる状況である。このため、私は見学体験の興奮や、気おいても何処へやら、三番方より取明け作業に従事したものである。

この夏、下層開発も待望の着炭をみて、二鉱の終掘体制と合せて下層区域へ及び一鉱への移転作業がすすめられ、一鉱へは最終的には1,227名中465名が配転されて来た。

炭層状況も^{ふけ}深に行くに従ってフラットになると期待されたが、褶曲やら急傾斜と切羽条件が好転せず、遂に自走柵の話は立消えとなった。

只救いであったのは、発破採炭でピック1台当り^{メートル}14.50Mの出炭をしたことである。北炭では幌内のホーベル現場に次ぐ第2位の能率を挙げた事であった。当時、採炭の賃金は定額化し

142%の頭打ちであって良く文句を言わずついてきてくれたと感謝している。この時の出炭記録は『炭鉱技術』に掲載され順序よく整理して保管していたが閉山引越し等で今はなく振返って偲ぶことも出来ず淋しい限りである。

今1つ思い出に残るのは、或切羽で面長ロング 135 M^{メートル}、下部の炭層傾斜 20°～25°、上部は切羽進行に従ってだんだん急傾斜になって来た採炭現場でのことである。支保はT・K千鳥杵、そしてレンジングドラムカッターを使用し、転炭と飛炭防止のため種々工夫を凝らして保安装置を施し乍ら採炭をしていたが、係長は「危険になって来たので、機械採炭は中止せよ」との指示があった。が、私は「いやまだ掘れる」と敢えて強行したものの、日々傾斜が起ってくるし、怪我人を出したら、カッター或いはフィードチェーンが切れて逸走して事故を起したら……勿論自分の責任ではあるが、上司にまで迷惑を掛ける事になると自問自答し乍ら、細心の注意を払って 55°迄切截したので、ここで「ヨーシ、これでドラム採炭は中止、ピック採炭に切換える」と2番方よりのピック採炭の段取りをした。しかし、思えば一方的な事後報告許可であり、採炭様式の変更は生産課長の所轄事項に類するのではないのか、それを1係員が独裁的に判断して行動をすることになったが、当時の上層部の考え判断は知るよしもないが、誠に汗顔の至りであると今でも反省している。

然し経験としては貴重であり、工作課の係員と横の連絡を密にし、保安上の点では充分留意した事と、カッターは油圧機構であって傾斜によって本体の油が片寄り空気を吸うとそれまでと止まってしまうこと、そしてDCCリターン部は盤打ちして緩傾斜としそこまで運転を止めず一気に切截する点に留意したこと等は貴重な経験であった。この結果期間中機械採炭システムは故障もなく、これが自信となったのも事実であった。なかんずく下盤が地山でなく軟弱なため立柱1本1本に対し土止め^{どど}を施した。こうした滑走崩落の防止は特に仕事の正否を分ける重要な留意点であった。

この様に切羽条件が各切羽によって極端に変化しドラムカッターの使用に適さないところは、ホーベル採炭等努めて出炭能率のアップに努めるも、旧二鉱からの鉱夫移転増に伴っての出炭量の確保が難かしくなり、ついに重装備採炭は時が経つにつれ遠い現実と化して行った。

これに較べて新二鉱は46年12月より三方連続採炭の操業体制に入るため三番方の入坑時間を11時の入坑体制に替った。生産体制の基本方針も示され、その内容は①機械化促進による採炭能率のアップという事であるが、これは炭鉱発展の課題として理解出来るが、②3方採炭実施による請負給の作業形態ならびに標準作業量に関する提案の方は労働強化と賃金引き下げに通ずるものとして労働組合の反対するところとなった。かくて、合理化反対闘争へと展開して行き交渉を重ねた結果47年2月22日妥結を見て、3月1日より全鉱操作と出炭奨励給の制度を実施することになった。

これに先立ち47年1月4日より新二鉱の営業出炭体制に入って、重装備による3方採炭と言う初めての試み、特にゲード内の排水対策等総ての職種の人達が不安と疲労と闘いながら苦勞の連続で一歩一歩隘路の打開に努めたと聞いていたが、1月の新体制から、わずか4ヶ月で軌

道にのせたことは大きな前進であり、ヤマの自然条件の問題もさることながら、機械化の波は大きな転換をもたらしたといえよう。

然し一方では標準作業量の問題で一鉱と二鉱の切羽操作の違いから問題を残し尾を引くこととなった。即ち一鉱の場合は旧二鉱からの配転人員増に伴う生産計画にヒズミが生じ、ガス突出事故による人員配置のアンバランス化、新二鉱への配転、体質改善などの諸条件が持上り、坑内条件の悪化と相俟って様々な矛盾を生み当然のごとく収入減が比例して表面化していったのであった。

こうした見直しの要求は北炭全山に及んだが、この結果労連段階で見直しと集約を行ない、団交を開始したが、会社はこの標準作業量をゆずることは会社再建のメドを失なうことになるとしてゆずらず困難な道を歩んだ。

この段階で夕張炭鉱の全鉱標作は2段階に分けて変更確認を見たものの一鉱は142名すら確保困難な事情が明らかとなり、検討を重ねて行ったのである。

この年三菱鉱業所大夕張の閉山騒動も全山投票によって結着がつけられてから、間もなくの7月5日、6日に行なわれた北炭労使協議会で第一鉱の閉山提案が出された。

その提案内容の概容は次の通りである。

「北炭の命運をかけた夕張新鉱開発は、着工以来2年8ヶ月にもなり、大幅に計画がおくれたが、去る7月2日に第1立坑とベルト斜坑がマイナス600^{メートル}Mの地点で貫通し、7月より水平展開に移り、本格操業体制に入る見通しである、この人員確保は、夕張一鉱と平和炭鉱より求めるが、取敢えず、48年8月より12月迄に、夕張一鉱より逐次移行する。但し一部は平和炭鉱に移行する。平和炭鉱は、49年度4月より50年度7月までに夕張新鉱に移行したい、尚当初清水沢炭鉱の移行を予定したが、その後、労使双方で検討した結果、同鉱は引き続き存続する。

一鉱閉山の理由は、40年の災害後約20億円の投資をかけて、深部展開を実施し、43年より採掘を続けてきたが、急傾斜の採炭切羽のため、ドラムカッターなどの機械は不可能となり、出炭能率が低下、それに加えて右二片滑走性ガス突出現象が発生するなどで、ガス湧出量が非常に多くなり、保安維持が困難になったために、継続稼働が出来ないということであった。」

この時点では政府と道も北炭の新鉱開発促進が第一で、会社としても運命を掛けた事業で大幅計画遅れによって開発資金も予定より大幅に上廻りこれ以上分散投資は不可能であり、人員確保問題と絡めての結論という点では理解出来るとして80日を残す闘争ではあったが完全雇用、諸条件も一定の成果を上げ格別の波乱もなく、夕張発祥の地として、84年の伝統と歴史を持つ一鉱も終にスクラップを見直されることもなく閉山されることになったのである。また住み馴れたヤマから去ることは、一大決心をしなければならなかったのである。10月初めから新鉱への第1陣164名が移動を開始し、以後段階を追って移動が行われていった。その間撤収作業、そして立入坑道600^{メートル}Mは万字道路の下ということで全充填方式とし坑口が閉鎖されたのは12月8日で84年の歴史ある坑口に幕をおろしたのである。小生も立入坑道の全充填に見通し

がたった時点で（11月19日）新鉱に移籍した。

一鉱人員の配転内容

鉱員	夕張新炭鉱	310名
	新二鉱	94名
	電力所その他	3名
	鉱務課	13名（長欠者）
	退職者	249名
	合計	669名
職員	新炭鉱	33名
	新二鉱	5名
	清水沢	6名
	平和その他	17名
	合計	61名

石炭見直しムードの中で、出炭増を目指す万字炭鉱に、一鉱閉山の鉱員36名と職員4名（新鉱配転組より2名）が支援のため入山した。

万字炭鉱は48年秋以降思わぬ断層に次々と逢着し、出炭は3分の1に低迷してしまった。このため新区域への開発が急がれたが人手不足のために、開発は遅れる一方であった。この人員充足のために種々対策したが結局この残留者に白羽の矢が立てられたのであった。

当初種々保安上や労災等の難かしい問題もあり監督官庁の許認可上、初めてのケースだけに、戸惑いを見せたが、北炭友山のためと言うことでもあり、且鉱員の資質の判っている職員と言う事で、新鉱から山口、菅井両氏が赴任し、沈滞ムードを一新する活躍を見せ目標出炭である1万7,000トンも間近いといわれるようになった。だが2月1日に人車脱線事故が起り、死者2名を出し、夕張からの支援組も5名負傷するというアクシデントに見舞れ、再びピンチを迎えたが、なんとか苦境を乗切った。こうして4ヶ月にわたる滞在の間、ヤマ男たちの暖い交流とエピソードも生れ、休日に帰って来た時等色々と楽しい話も聞かされた。

万字に出向した、旧採炭先山のF君が、人車脱線事故で負傷、その時テキパキと治療にあたった若い看護婦さんの看護にほれこみ、夕張に残してきた若い後山のK君のお嫁さんにと白羽の矢を立てた。F君は元来ユーモアのある人で、周囲はいつも賑やかだったので、私も冗談かと思っていたが瓢箪から駒か遂にゴールインしたのであった。

当時“万字に咲いたある愛の詩”としてヤマの仲間から祝福されたものであった。

第二編 北海道炭鉱汽船(株)夕張新鉱時代

一章 夕張新鉱開発課時代

48年11月19日、第三陣として赴任した。所属は、開発課開発主任であった。常態的には出水等によって、又計画より予想以上の盤圧に悩まされ新鉱開発工事は大幅な齟齬を来し、懸命な努力を重ねている最中であった。それだけに1日坑内見学の後翌日より本方業務についた。

作業遂行に当って基本方針として私は次の2点を目標に掲げ、その実践に務めることを誓った。

第1にここは夕張でも平和でもない因習に捉われることなく悪慣行は排除して労働協約に基いた炭鉱作り新鉱の気風というものを育てようと誓ったものであった。

当時一鉱と平和の混成部隊であり夫々のヤマの習慣もあって随所に小さなトラブルが発生したが、むしろないのがおかしいとして積極的に正常な姿を守るべく毅然たる態度で終始押通した。

二炭鉱の労使の在り方には大きな違いがあり労務管理の難しさを浮彫りにした感があったが、茲が正念場であって、新炭鉱を生かすも殺すも先達としての責任であると自覚職員一同一体となって守ったものであったし、この点非常に良く浸透され、時には厳し過ぎる思もある位よく鉱員諸志も奮闘され感謝したものである。

第2は生産性向上を実現することである。

気負ではないが“親の背中を見てあるく”の假令^{たとえ}もある如く、自ら律して仕事に打込む気力は恒に持っていた積りである。私の一鉱時代深部開発の経験から、今日の掘進延1M^{メートル}余計延びれば、最後の3M^{メートル}にも4M^{メートル}にも匹敵する、だから簡単に切羽を外すことのない様、少々無理があっても、掘進切羽を掛けることが出来る場合は掛けようと誓った。しかし、新鉱はガス問題が必ずつきまとう。従って人材資源が揃っていても、掛けたくても掛けられない。つまり、ガス抜に要する時間は絶対確保しなければならない、それだけにこの開発途上を大事にしたい。この辺の考え方と指示は徹底して、それなりに努力をし合って来た。そういった意味で、よく上司から主任が発破かける必要はないと言われたが、頑なまでに、係員が休んで補充がつかない、自分が掛けることによって、切羽が稼働出来、且皆さんの協力を得られるならと押通して掛けて来たが、全体の掌握、保安上のこともあり、周りの協力を得て出来ることであり、それだけに切ない事もあったが、よく扶けてくれたと感謝もしているし、自分の信念を通させたことにより独り納得もしている次第である。しかし、新鉱はガス山であるため困難な仕事場で次の2点の問題を抱えている。

1) 請員給と標準作業量の設定問題

業者関係の実績はあるにせよ、新たな地質で工数換算方式を如何に生かすか種々と先見の明をもって設定する必要があると議論をした点でもあった。

考え方として

イ) 完全請負としこの精神を生かそう。

ロ) 今はよいが坑道の切廻しが進むにつれて職種のバランスが崩れ人手不足が必ず云々される事態が到来するであろう。従って掘進切羽に付随する作業は出来るだけ基準に包含着して実施する様、凡ゆる単位作業を網羅して基準設定をした。

具体的には、レール延長圧搾管、撒水管の延長、風管延長、DCC 布設の場合はトラフ延長等を切羽人員で消化する事にした。つまり、一方一サイクルの作業を確立することである。

2) 地層の変化と盤圧問題

切羽引立の地層を調べると各切羽共、毎日同じ地層引立状況は皆無に等しい程擾乱を受ける変化の激しい地層であった。従って開発計画では3人/M^{メートル}であったが、到底消化出来ず、当然人員計画に齟齬を来す結果となり最後まで悩まされ続けた。

北大に依頼した地圧測定でも通常深度に対する公称地圧より30%以上の強い地圧を受け、この対策が緊急課題であった。さらに、新鉱はガス山でしかも断層の多いことから(1)坑道の維持と(2)ガス突出の防止を次のように課題とするのである。

イ) 強い盤圧対策

当初荷重方向は別としても、坑道掘進は留間1 M^{メートル}を取り、ベタ丸矢木と34.7 kgのI ビームアーチを使用していたが、アーチの変形が甚しいため、古枠の坑外搬出も膨大な数量工数が掛かるため(35 kg/M^{メートル}の荷重によりアーチの変形を起す～北大理論計算上)この対策として、より剛性支持の立場から、枠間0.50 M^{メートル}に縮め推移を見たが、この結果矢木の損傷が全くなり、そこまで縮める必要もないとの結論に達し0.70 M^{メートル}の留間とすることとし、そうすれば1 M^{メートル}の留間より盤膨れを防止するだろう。従って拡大よりも盤打ちで坑道維持が図れる。そのため盤打機SDLを有効活用する方針で、幹線坑道は休日を利用し、一〜三方でレールを制して盤打三方で元に復す方式として、SDLを使って1日50 M^{メートル}の実績を上げた。然し昭和50年11月組合に出た後は実施しなかった様である。惜しむらくは率先して実施させる、或いは実施する気力と言うか。プラスになることは方針として、誰が変わっても継承して行く追及の姿勢が失われたのは誠に残念なことである。盤打機については細々と災害時まで実動していたが、フロアボルテングは試験段階で、纏まった結果も出ていないが、主流はトルクレット工法で坑道維持対策と坑内火災対策の面から積極的に実施していた。

ロ) ガス突出対策

開発は本命である10尺層の上層である幌加別層より雑炭も含めて6枚の炭層を逢着炭したが、No 5, No 6, 上4尺はボーリングにより難なく通過したがやっかいなのは下4尺層で踏前から露われ三分機アーチの接合部の高さまで炭層が上ると必ずと言ってよい程、何等かのガス突出を起した。ボーリングも両サイドより貫層もしており、慎重に掘り進めているが、こ

の様なガス突出現象が起る。ガスの透過性の問題ではないのではないか、或いは地層圧の解放による滑走にガスを伴って起きる現象か、等々種々意見が分かれるところであったが、特別の研究結論は出なかったが、坑道掘進の安全を十分担保するよう、

- 1) 警戒区域の指定
- 2) 警戒区域の予知措置
- 3) 指定切羽の基準
- 4) 予防措置
- 5) 自噴量 自噴圧について
- 6) 発破対策
- 7) 保安施設について
- 8) 保安教育の徹底
- 9) ガス突出対策の研究

等について保安管理者許可を含めて細かく規定し、且つ実行した。この事によってガス突出のメカニズムは判らないが、データーの集積関連性について、実施体験に基いて補捉をした。開発時代には、幸いにして、前記ガス湧出は生じたものの、適正なる規制の遵守を実行し、この種の人災がなかったのは幸いであった。

然し営業出炭開始となって、言いつくせない苦勞を乗越えてのことだけに感慨も新たに大いに張切っていた矢先に新山沿層坑道掘進でガス突出事故が発生し、係員と作業員5名が死亡し、負傷者15名が出る重大災害となった。

この災害はあらゆる意味でいままでの在り方を見直すキッカケとなった。

この災害前後の北炭についてみると、49年に新鉱で死亡3名、清水沢鉱で死亡2名、万字鉱で死亡2名、重傷20名等々の災害が相次ぎ政府からきつく改善指示が出されていた。50年の営業出炭前にも、運搬事故で2件の死亡災害があり、一方真谷地炭鉱で坑内火災が発生し、経営危機に拍車がかかり、1月28日の労使協議会では「争議行為回避の休戦提案」が出された。新鉱は少しでも遅れを挽回すべく懸命であったし、4月には萩原吉太郎会長が復帰して人事が一新された。

一方閉山の過程を辿る平和鉱では、撤収のかたわら浅部の好条件箇所では採炭が行われ4月と5月とは新鉱の資金援助に役立ったと思われる。この年8月には系列の万字炭鉱が水没し、11月27日には、北炭の危機を決定的状態に追込んだ幌内炭鉱の爆発事故が発生した。

二章 組合専従時代

夕張新炭鉱の営業出炭開始に合せる様に先に夕張と平和の両職員組合が大同団結して、北炭職員組合（夕張）は平和地区に事ム所を設けていたものが、清水沢宮前町に新築完成されたのに伴い50年8月に移転し、常駐4名体制で新炭鉱、新二鉱、清水沢、真谷地、電力所、地質、

病院、促成地区その他外局職員を統轄した。

この春4月の統一地方選では、楽勝と思われた矢口候補を落選させ、改めて組織上の責任を問われ又北炭協議会としても組織対策委員会を開いて在り方について論議されている折柄、副委員長が退職空席だったところから、第二鉱の事情に通じ且新炭鉱を掌握出来る人物を物色中であつた。小生は遇々白羽^{たまたま}の矢が立って、11月より組合に出る仕儀となつた。これ迄の在職中、現場に専念し組合業務にタッチしなかつたので全くの素人であつたが、私の任務を明確にする必要があつた。このため私は①新炭鉱開発の特殊性から、ガス突出のおそれ或いは自然発火対策、坑道維持等、数多くの問題を抱え、職員組合の立場からなすべき事が多くさんあると考え、②職員の二面性から、基本ばかりに囚^{とら}われて労働運動という訳にもいかない難かしさがあるが、帰するところは会社の業績乃至はその調和の中から判断しなければならないし組合員をリードしなければならないと考えた。このため、私の姿勢は、従つて事に當つて絶対虚は言わない正直ベースで進もう、それが受け入れられないとするならば敢えてこの職に固執しないとするものである。

私はこの2つを基本にして行動をすることゝした。当時は副委員長として新二鉱と新炭鉱担当となつたが、組合員の地位向上と言う面では1度事故が云々されると否定されかねないだけに、非常に心を砕いた問題である。会社も職員だからと安易に労働組合と妥協してそのしわ寄せを職員に押しつける結果となり閉山に至らないように腐心した。この組合専従時代は(1)昭和50年の幌内炭鉱のガス爆発、(2)新鉱の採炭対策、(3)56年の新鉱ガス突出に集中して取り組んだ。

(一) 昭和50年幌内炭鉱ガス爆発と再建問題

専従となつて1ヶ月も経たない11月27日幌内炭鉱で爆発災害発生^{の報}があり、友山の見舞応援に駆けつけた。

過去に2度救護隊の班長として入坑した経験があり、それなりの智識はあつた。排気立坑のガス分析では坑内火災の様相を呈し一刻も早い消火対策が必要で、そのためには、坑内状況の把握が急がれるところであつたが、「現地監督官」の許可が出ず、札幌、立地公害局との連絡に終始し、遂に深夜に及ぶも何等進展なく、坑内は手を拱^{こまね}いて坑口観測のみ行われた。

坑内火災の発生では、到底坑外では考えられない速さで火災が進行するところから（経験では10分間に約150 M^{メートル}燃えた）炭層に火が入ったら、手の施こし様がない状況となる。発生後の時間経過からして、大災害となつて来たと判断される。「職員組合対策本部」の立場で、一刻の猶予もならず救護隊の探検方について要請することとし、現地の通産対策本部と接衝した。ようやく進展したのが、暁方であつたらうか、救護隊の報告では既に四片方面まで、火災が進行しつつあり、四片の排気連絡坑道にも火があり消火中との事で、採炭切羽は五片六片で稼働中であつたが、炭層に火が入るのは時間の問題となつた。「4片レベルまで注水する」との考え方が示されたのは、29日夜半になつてからであるが、注入方法に問題があるとして会社幹部に具

体的に説明を求めることにした。しかし、その過程では一応納得したが、今でも悔まれるのは、会社の幹部も吾々も睡眠を取っていないので、頭の回転が悪かったのか、注水方法は排気立坑から行うという決定である。吾々としては、それなら4片から注水するから6片まで大した事はないと考え、救護隊をその儘入坑活動させるとの説明にも理解をした。

ところが実際には、排気立坑々外より10吋で注水され、落下につれて水幕となり、全断面を覆う状況となった。この結果加速度＋重力圧は通気を逆流させ、坑内は混乱状況となり、緊急退避をしたが、幸い負傷者はなかったが、二次災害と言えるもので、折角問題点を指摘しながら、最後の詰めで自己流に早合点した事もあり、幾何睡眠不足とはいえ、悔の残る対応となった。このことから以後は教訓として慎重に対処する事を心掛ける次第となったのである。

然し経過から坑内状況は好転せず、遂に2片まで全坑水没の止むなきに至った。幌内炭鉱の命運をかけた再建問題が石炭鉱業審議会をはじめ社会問題として取上げられる様になり、常盤地区の残炭掘りで僅かにつなぐ縮少案が大勢を示しつつあった。

然しそれでは炭鉱は死んでも同然で存続たり得ず、願わくば技術的には、炭層の上下盤が夕張と比較して断然良好で砂質岩で水没されても揚水後泥状化或いは盤膨れもそれ程でなく、復旧し易いのではないかと、思考されこの辺が条件的に満たされれば～と再建運動にも熱が入った。希求するところは北炭一丸となって資金的なものを、はじめとする合理化対策を基本にして援助する事、又復旧の間、所要人員を残して他は友山に出向し出炭増に協力する事を北炭労使で取決め、幌内炭鉱の鉱員を①新炭鉱、②清水沢炭鉱にそして③真谷地炭鉱に受入れたのが51年のことであった。

そうこうしている中に災害後の揚水、坑道の整備は順調に進み、当初予想した様に水に浸っても上下盤は安定していた。坑道修繕後山圧による変形も認められず素晴らしい坑道が出来つつあったし、他方昭和51年10月、衆議院石炭対策特別委員会、参議院資源エネルギー対策、小委員会が開かれ、萩原吉太郎会長等労使が参考人として出頭することになり、政治的には大詰めを迎えた。

この中で、萩原吉太郎会長は、「保安上不安があれば再開すべきでないことは申すまでもありません、取明けて見なければ何人も断言できないことでありますが、私はこの事故は深部なるが故に惹起したのではなく、発破に当って対策が十分ならば起らなかったと思っております。幌内鉱は養老断層に近づけばガス突出のあることはわかっていたことであります。過去において浅部においても、屢々起った現象であります。全山水没という結果となったために、初めから大災害が起きたような印象を受けておりますが、全鉱火災に発展したのは事後の処理に慎重さを欠いたためだと反省いたしております。山が悪いのではなく人が悪かったのだと、いいたのであります」と発言された。所謂、人災であり不可抗力とは言えなかったとした発言が問題となって、通産省に呼ばれたり、又三井観光の資産の経過及び合併して「北炭の再建を考えたらどうか」等の質問があったりしたが、これに対して「経ってみればわかるし、やるときは黙っていたします」と答えた一事に対し物議を醸した。が、その真意は、ひたすら思うところを正

直にお答えしたと萩原吉太郎は述懐されている。

この様な経過を辿りながら、その再建が危ぶまれた幌内問題は、全国的な支援を柱に、厳しい障害をはねのけ1年9ヶ月にわたっての努力が奏効し、51年6月30日、石鉱審に設置された「北炭再建専門委員会」の認めるところとなり、奇蹟的再建を果たした。

尚水没のため、行方不明者の遺体が収容されたのは、52年6月であった。(死亡行方不明25名)

また、同月13日に発生した「台風6号」は、日本海を北上して北海道を直撃し、道南から道央にかけて大きな被害をもたらしたが、夕張では全市的に水道が止まったほか、大夕張線の運行停止などの被害が発生、市中を給水車が走りまわった。然しなんと言っても、友山である万字炭鉱では、台風6号の影響で架線に故障が発生し、主扇が停まったため坑内の電気系統にトラブルがおき、遂にポンプが浸水停止し、坑内が水につかってしまった。この事故が万字炭鉱のいのちとりとなり、その閉山を早めることとなった。

(二) 夕張地区の閉山ラッシュと夕張新鉱への統合過程

幌内と万字対策に明けた51年であった。数次にわたる実行使、中央陳情行動、他山への出向など、あらゆる対策が行使されて幌内、万字両鉱再建の努力がなされたが、万字炭鉱は、親会社が資金的に支援する力は既になく、四囲の状況から、「対置要求」に切換え、たたかいを続行、3月25日に至って労使双方が了解点に達し、閉山の決定を見た。

又清水沢炭鉱の存続のために計画され、昭和50年度下期から着工する予定だった「東部開発計画」は会社の説明によると、幌内炭鉱の重大災害による行方不明者の救出と復旧作業に150億円の資金が緊急に必要なを迫られているために向う1年間延期せざるを得ないという事であった。結果的には、幌内災害が引金となったとは言え、若しこの計画が実施されていれば新鉱で終始悩まされた対遇式の通気問題とガス突出も新たな展開を見せ違った局面になっていたであろうと推測され惜しまれてならないのである。

A 「新鉱5,000トン体制を中心とした合理化案の提案」

9月16日開かれた北炭労使協議会の席上、萩原吉太郎会長、斉藤公社長は「会社創立以来の危機を乗切るために、組合の協力を御願いしたい……」として(1)清水沢の東部開発の中止、(2)幌内炭鉱の深部開発、(3)夕張新鉱の5,000トン体制を中心とする合理化提案をおこなった。

昭和52年は、うちつづく不況と景気の底冷え……ひとり石炭産業ばかりでなく、史上最高の倒産と失業が激しく日本列島を覆った。この年も「2月賃金について資金繰りが困難なので、労働金庫から借り入れ支払いたい」と申入れがあるなど、労金借り入れが恒常化し、なんとも暗い幕明けであった。

社会党は「石炭資源活用法案」を国会に提出し、炭労も石炭政策要求を通産大臣に提出するなど経済合理性への一辺倒の考え方に基本を置いた政府、石炭審専門委員会の態度を批判し、覆すべく運動を続行した。

こうした中で3月31日住友赤平にも大合理化案が提案され、この合理化をめぐり、政府に要求書を提出するなど石炭情勢も緊迫の度を強めていった。

B 夕張新鉱8月閉山の提案

そうした最中北炭では、かねてその存続について闘いを進めていた「夕張新鉱」の8月閉山が4月11日に会社から提案された。炭労はその提案に厳重に抗議し、閉山撤回を申し入れたが、会社はその意志がなく、炭層賦存状況の劣悪化等鉱命問題をめぐって膠着状態をつづける中で通産省が「政府見解」を発表して事態収拾にのり出し、それをめぐって内部論議が交された。その結果、労働組合は「条件闘争」に路線を変更して一定の条件を獲得し、同年8月より新鉱に移行を始め10月末閉山となった。

C 夕張新鉱2,000名体制について

再建計画の中で新炭鉱は5,000トン体制の確立をと2,000名の人員確保が至上問題であった。が、幌内炭鉱からの出向受入れに伴って坑道の整備、切羽の増設等徐々に効果が表れつつあったものの即効性は望むべくもなかった。出炭も4,500トン台で指標である5,000トンは確保出来るのか、出来ないとするばコンスタントな能力は1体幾何なのか、新鉱の在る姿について心ある組合員の中で種々論議の対象となりつつあった。余談ではあるが7月始め入坑して出坑後神野哲一炭鉱長に「今なら5,000トン出ると考えられる。私の経験から「線香花火」でもいい。出る時に出さないと特に新鉱の様な難かしい炭山では永久に出なくなるのではないか。自信をつけるためにも是非必要でないかと思う、そうする事によって運搬選炭機、機械全般の問題点も浮彫りとなって前進するのでないか」と申上げたところ炭鉱長としては、当然であるが、コンスタントな力を蓄えてから出したいとの意向であった。幸い主力切羽の新鉱と幌内組と別れて良きライバル意識もあり遂に待望の5,000トンの声を聞いたがほんとうに線香花火の17日間であったが全般の能力確認には大いに寄与した。然しこの年100万トンを僅かに超えたのが最初の最後であった。

この様に再建計画の根幹は早くも崩れ、北炭の危機は更に加速を増したと言える。こうした10月の或る日、北炭協議会のメンバー8人に、萩原吉太郎会長から会見の申入れがあった。席上、萩原吉太郎会長は再建計画の遂行状況が肝心の各炭鉱の出炭が伴わず早くも頓挫を来た結果となっていると説明し、このため再建計画の見直しの事態に追込まれていると強調した。さらに、萩原吉太郎会長はこれを深く反省すると同時に、原因と対策の提案を次のように行った。

- ①最大の原因は各炭鉱が甘えの構造から脱却せず責任体制が薄れている。
- ②従って各炭鉱が自立体制の確立を早急に行う必要がある。そのための機構改革を行う。
- ③東部開発を中止する。

検討したが相当な断層帯があり出水の危険もあるし新鉱の2,000名以上の労働力の確保が難かしい。

- ④この儘では政府の支援も打切られ北炭の命運もこれまでとなる。

非公式ながらこのような意志表示があった。ホテルの一室で円卓を囲んでの話の最中、キナ臭いので探したところ会長の大きな鞆の中より煙りが出て居て、付添の方が慌て、鞆から書類を出したところ、膨大な書類の表書きには、会社更生法申請書の文字があり、容易ならざる事態である事は百万言よりこの事実が何よりも今日の北炭の姿を端的に示していると身の引緊まりと戦慄を覚えた。

これらの点を踏まえ、萩原吉太郎会長は炭鉱部門の「四社分離」など北炭再建見直し案を提示するのである。そして、正式には12月5日～6日札幌で開催された特別労使協議会の席で萩原吉太郎会長より、昨年10月19日協定破棄、東部開発の中止、各炭鉱部門の分離等の厳しい見直し案が提示された。冒頭萩原吉太郎会長は、「背水の陣で見直しを行なった、なんとしても北炭を守るため組合の理解を得たい」と所信表明をし、下記の再建案を提示する。

(三) 修正再建計画策定までの経緯

政府、支援金融機関、ユーザー等の注視のもとでスタートした再建計画ではあったが、幌内炭鉱の復旧作業は順調に進捗し7月1日には7片の13遺体を収容し、昭和52年10月1日から日産1,000トン、12月以降2,000トンというように略計画通りに推移した。その反面一方の核である夕張新炭鉱の目標5,000トン体制については極く短期間を除き、計画未達の状態であった。その為あらゆる角度から生産諸条件を見直したところ、日産4,300トンから4,500トンが当面平均的に確保し得る出炭能力であるという結論となった。再建計画の目標を5,000トン乃至7,000トン下廻る生産量となることが略判明したことによって資金的に問題が生ずることは当然であり、昭和56年迄の再建期間中に不足する資金を支援関係方面からの協力により確保し得たとしても尚、390億円の膨大な資金不足額を生ずることが明白となった。したがって、ここに再び再建計画の修正見直しを迫られることとなったのであると萩原吉太郎会長は述べ、次の再建案を提案した。

提案内容は次の通りである

「Ⅰ. 清水沢炭鉱修正再建計画案（全文）」

清水沢炭鉱は現稼働区域の炭量が枯渇するため、再建計画では53年より東部開発工事に本格着工し、56年度より新区域に移行する計画となっていた。東部区域は、もともと夕張新炭鉱の開発対象区域であり、45年夕張新炭鉱開発が認可された時点では平和、清水沢両炭鉱を閉山してリブレースする予定であったが、その後採掘条件の悪化により終掘した夕張一鉱、平和炭鉱、夕張新第二炭鉱が夕張新炭鉱へ集約されることとなった。

このリブレースにより夕張新炭鉱の所要人員は当時の計画ではほぼ充足できる見通しであったため、50年に入って清水沢炭鉱は新たに東部区域へ進展する計画となった。しかし夕張新炭鉱の5,000トン体制確立が遅れたことに起因して再建計画の見直しが全社的に必要となったので、清水沢東部開発計画についても夕張新炭鉱の実態を踏まえ、次のように検討を行なった。

1. 検討事項

- (1) 開発資金計画について再建計画では坑道補助金、生産近代化資金、鉱害防止資金によるほか、その他財政資金に加え、市中銀行の援助を期待し左記のように資金計画を組んだ（単位 100 万円）。

		52 年度	53 年度	54 年度	55 年度	計	備 考
開 発 資 金		573	2,383	2,782	4,758	10,496	$\frac{1,550+5,800+450}{10,496}$ $=73.9\%$
現行財政資金		256	258	468	1,755	2,737	
対策	そ の 他 財政資金		500	500	500	1,500	
要請	市中民間 資 金		1,500	1,800	2,500	5,800	
差引自己資金		317	125	14	3	457	

上表のように対策要請借入金と自己資金は所要資金の約 74%であり、すでにこれまでの借入金の元利棚上げについて協力を仰ぎ、かつ今回の見直しの結果 52～56 年の間において 296 億円の資金不足を生じ、この不足に対する援助措置を政府をはじめ市中銀行並びに民間支援各社にお願いせざるを得ない現在、新債の調達は不可能である。

- (2) 東部開発の工事工程は、相当な断層帯が予想される区域を通過するので、計画通り坑道掘進が進捗しないことが危惧され、その場合現区域の残炭量からみて採炭休止期間が生ずることとなる。
- (3) 夕張新炭鉱の実態を考慮すれば、再建計画時に見込んだ高能率の安定出炭は期待出来ず、直轄坑内員については約 740 人が必要と考えられる。

①東部開発工事に必要な請負組夫（出稼）は 53 年～55 年において 170 人～190 人必要である。開発工事完成後には直轄坑内員（在籍）は約 740 人の見込みであり、現在々籍が 606 人であるので、55 年末には坑内員約 130 人の新採用が必要となる。

② 1 方、今回夕張新炭鉱の見直しによる所要坑内員は 56 年度において再建計画に比べ 317 名（出稼）の増であり、毎年約 130 人の新採用が必要である。

③また、幌内炭鉱は 52 年 10 月から生産を再開したが、54 年度日産 4,500 トン体制までに毎年 120 人～160 人（新採用再採用）を採用する必要があるほか、現在の請負組夫（出稼）は約 60 人であり、54 年までには約 160 人に増員する必要がある。

以上のように年々かなりの坑内員の採用が必要であるので、当社の現状からみて、人員の面からも東部開発を行うことは無理である。以上検討の結果、清水沢東部開発は中止せざるを得ないと判断した。

2. 閉山の時期

清水沢炭鉱現区域の残存炭量は 52 年度稼働分を含めて約 125 万トンであるから、閉山時期は原則的に 54 年度末と推定される。これに対処して、夕張一鉱、平和炭鉱、夕張新第二炭鉱と同様に夕張新炭鉱に移行する方針をとっているが移行計画については現地において組合と事前に協議を行う。

尚閉山に伴う条件については、従来の実績と当社の実情を勘案して別途協議する。

II. 炭鉱部門の分離（概容のみ）

1. 北炭株式会社を次の通り分離する。

- (1) 北炭社（資本金従来通り 70 億 2,200 万円 石炭販売と輸送）
- (2) 夕張炭鉱株式会社 資本金 10 億円
（新炭鉱、清水沢炭鉱、電力所、炭鉱病院を含む）

(3) 真谷地炭鉱株式会社 資本金 3 億円

(4) 幌内炭鉱株式会社 資本金 5 億円

2. 分離内容

(1) 分離にあたっては、資本金は全額北炭社の出資とし、53 年 10 月 2 日より新会社として発足せしめるが、各炭鉱 KK 毎に負債を分割負担してもらう。

(夕張 KK 約 646 億 真谷地 KK 約 30 億 幌内 KK 約 240 億)

(2) 移管に際して給与、労働条件は従来通り退職手当は勤続年数を通算する

(3) 各炭鉱の将来について

① 新炭鉱

現在の四切羽を五切羽体制確立のための北部展開を行う。

53 年上期より着工し、工事期間は 3 年 3 ヶ月、56 年 7 月より日産 5,500 トン体制とする

(註) 計画

年度	出炭	人員	能率	設備投資計画
52 年平均	4,232 トン	2,029 人	54.8 トン	37.02 億
53 年	4,419	2,003	56.7	48.26
54 年	4,412	2,040	55.4	56.88
55 年	4,719	2,310	52.5	40.72
56 年	5,272	2,281	59.8	33.04
57 年平均	5,500	2,173	62.2	
計				215.92

② 幌内炭鉱

現場区域は 9 片まで(可採炭量 1,330 万トン)、従って 56 年より北部を着工開発し 60 年完成する。開発費用約 124 億 5,500 万円

③ 真谷地炭鉱

13 片以降は大規模な投資が必要なので採掘しない。従って、穂別に新炭鉱を増設するか、引続きの操業については組合と事前協議する。

④ 化成工業所については、53 年 3 月に閉鎖する (人員 116 名)

(4) 労働条件について

53 年以降は大手四社と同様とし、カットについては経営実態をふまえて改善する。

(5) 自己努力として

不採用部門のカット、間接附帯部門の人員削減、財産処分(沼田山林、その他)を行う。

以上」

以上のように提案の内容があまりにも重大であり、今後協議会で再建の内容を詰めるが、組織上も重要な内容を秘めて居り精力的に具体的な交渉の中で明らかにする事とした。

然し会社が一方的に再建協定の破棄をしたことから展開された「北炭再建闘争」は、会社が多額の負債を抱え、極端に悪い経営状態にあり、一步間違えば「不渡り倒産」にもなりかねない危機的な実態から、その過程における会社回答に不満を残しながらも、北炭で働く組合員、家族の生活と雇用をも、根底から崩壊しかねないところまで追込まれている北炭の実態を分析し、1 月 18 日未明事態の收拾をすることとなった。

〈妥結の判断〉

(1) 分離

各炭鉱の負債の軽減を行う（1月11日確約）と共に債務負担、資産評価など基本問題と細部の確認は今後に残るが、各山の将来展望は現段階で一定の見通しが確立したと判断する。

(2) 労働条件

53年度以降大手4社並の条件をカットすることなく確約したこと

(3) 未払問題

出来る限り10月2日分離以前に解消を図るため最大限の努力をする

(4) 化成工業所の閉鎖

完全就職斡旋を原則とし条件等細部については継続して協議する

(5) 各社の人事面は計画達成後再度統合する含みもあり統一した管理をすべきであるとの考え方から北炭社に人事部を存続するべきであるとして要求したが、一般職員は各社の交流はないとの答弁で例外的に発生の場合は四社協定で退職金等の分担等明確にするとの回答があり、略明確になった

第三章 北炭職員組合の再編と解体

（一）修正再建計画の決定と新会社発足

以上に基づく判断から合意したが、然し夕張新炭鉱の出炭は依然として回復する兆しがなく経営は日増しに悪化の一途を辿りこれが打開策として

1) 緊急増産のための休日出炭態勢

2) 責任ある計画出炭の確保

など四項目に亘る緊急対策が提案され、検討の結果これを認め、実施に移されたのである。また再建計画（51.10.9協定）提案の時点においても問題視されていた化成工業所の閉鎖問題も、ソ連炭の使用などの一連の合理化を行って継続のため努力してきたが国内不況による鉄鋼不振のため、逐日悪化の一途を辿り、市況には勝てず、遂に立て直しは不可能であると判断され、既に実施にはいていた病院の整理統合に続き昭和53年2月末日付けをもって閉鎖することとなった。その結果一部の社内配転者を除き、大多数が他に職を求め北炭を去っていった。

以上の経緯から労使間合意が既に得られていたにも拘らず、夕張新炭鉱の出炭は回復せずこれが支援関係先の北炭不信を助長して、政府の正式受理するところとならず、大幅に遅延することとなった。

そのため労使の経営姿勢に対する甘さを指摘する声が大となり、当初案を更に見直すこととなって再検討の結果は生産、販売、設備投資の変更に加え、労働条件の低下を伴う再提案が提起された。特に労働条件については、昭和53年度の賃金、給与については引上げない。期末手

当は大手四社見合額の 50%とする。また今日迄の労務債についても、昭和 57 年度以降に支払うという厳しい内容のものであった。職員組合はこの提案内容を下部に説明し、各種機関を開催して検討を進めた結果、極めて苛酷な提案ではあるが現状の北炭のおかれている厳しい実態と、これが克服のためには政府をはじめとする市中民間金融機関、ユーザー関連各社の資金的援助、協力があってこそ実現できるという現実を率直に認識し、そのためには自己努力、内部努力があってこそ支援が期待出来るという判断に立ち、極く一部の修正意見を述べるに止め修正再建案を承認し、5 月 25 日調印した。その後多少の曲折はあったが、去る 7 月 20 日石炭鉱業審議会経営部会小委員会において正式に受理されるところとなったが、北炭に対する厳しい自己努力の要請に加え、この援助が最後の援助であるという注目すべき意見を付した上での認識であった。引続き 7 月 26 日、通産大臣の認可がおりて、10 月 2 日生産部門の分離に伴う夕張炭鉱(株)真谷地炭鉱(株)幌内炭鉱(株)が発足したのである。

(二) 北炭職員組合の解体と新組織（協議会）の設立

第 28 回定期大会（52.2.13）の決定に基づいて、職員組合（夕張）は引続き組織対策委員会を設けて組織運営強化の在り方について検討を進めていた。その後昨年 12 月 5 日に開催された特別労協協議会において、正式に三社分割案が提起されたため、従来の単一組織維持の方向を連合体化の方向に軌道修正せざるを得ない状況を迎えることとなった。

第 29 回臨時大会（53.1.18）は、会社再建見直し計画を諒承することが確認されたことから今後の組織形態を含め運営の在り方について引続き、組対委（組織検討委員会）において検討を進めるという決定を行った。

この決定に基づき第四回（53.2.13）の組対委では、独立新会社毎に職員組合を設立するが、新会社間における今後の労働条件、福利厚生関係等の諸問題の解決に当っては当該新設職組において取り組むこととするが、給与、期末手当、退職手当などの基本問題に対しては他産業、同業他社との関連が重要であり、また各社同一レベルの確保は是非はからなければならないという視点から、「北炭職組という単一組織形態を改め各社単位の組合に変革するとともに、連合会を結成してこれに統轄させる」。そのための具体的運営方法については次回以降の組対委において引続き検討するという結論とした。その後 5、6 回の組対委が引続き開催されて、単一組織を解体して新会社毎に組合を設立し、連合会（協議会）を結成する。尚準会員である空知並びに組織を異にする北炭都市連合会の正式加盟を求めることを基本とする答申が執行部に提起された。執行部としての内部検討を進め、去る 5 月 7 日開催された第 30 回定期大会において答申通りの内容で確認を得て今日まで推移した。

本来大会決定の趣旨からすれば、10 月 2 日の新会社発足に踵を合わせて新組合の設立、連合会の結成をはからなければならなかったが大会後の役選、委員長の兼務給与、期手、退手等の労働条件交渉、上部機関との関係と資金事情からくる給与支払い問題、新炭鉱の出炭不振、合理化の取り組み等々の解決のために終始したことによりこの準備には未着手の状態で推移し

た。9月中旬に夕張合同地区委員会、幌内地区委員会を開催して、遅延した理由の説明と併せて、11月中旬程度までの猶予措置を提起して確認を得た。尚その間の暫定措置として、あらたに真谷地支部を設けることも確認された。9月7日に開かれた特別労使経営安定委員会において、分離後における労使関係のあり方については、新会社と新会社に設立される職員組合との間で交渉協定をするというあらたな問題提起がなされた。その理由は、石炭協会との係わりが今後2種会員となったことを挙げている。執行部門で検討した結果、前大会において確認を得ている連合会という性格とは相容れない会社の提案であり、抜本的見直しに通ずる内容を含んでいるとの判断と同時に今後の対応の仕方について検討する必要性から既に設置を見ている新組織設立準備委員会の早期開催を意思統一した。こうして開催された第1回設立準備委員会(58.9.17)は、①大会に対する組対委の答申の中で、執行体制の項に暫定措置として各社の交渉事項中、特に基本的な問題例えば、給与、期末手当、合理化等の交渉には、上部機関が参加し得る体制をとるべきこととし、②1名の常駐役員を配置する③新組織の名称は北炭職員組合協議会とすることを確認した。尚規約、規定、予算執行体制等の具体案は常任役員で検討の上、次回準備委員会に提起して討議する。

各支部は早急に準備委員会を開催して新組合結成の諸準備を早急に整える。新組合並びに協議会の結成の時期を11月初旬ないし中旬頃におくことを確認した。

思えばそれ迄の鉱業所単位の職員組合を発展的に解消して、昭和39年9月に相次ぐ合理化による組合員減に対応し、組織の維持強化を図るべく単一組合として北海道炭鉱汽船職員組合は発足した。

その後北炭は相次ぐ重大災害の発生、慢性的出炭不振、炭量枯渇炭鉱群の閉山と代替新鉱の開発、作業管理の不徹底など多くの要因が複合して、経営の存否が問われる破局を迎えた結果、危機脱出の唯一の方策として生産部門を分離独立することによって生き延びる道を生み出したのである。これに伴い結成以来14年余の歴史をもって北炭職員組合は解体し新設会社毎に夫々独立組合を結成、あらたに相互の連繫を強化するため北炭職員組合協議会を設立することとなった。

(三) 北海道炭鉱汽船株の危機とその背景

1. 石炭危機に対する北炭の対応策

かくして分社に伴う組織の基本は決定したが、今次修正再建計画策定の最大原因の一つは、石炭政策の不充分さにあるものの、三井三菱住友太平洋の石炭四社にくらべ、殊更に北炭の企業実態が悪化しているのは、経営に取組む姿勢の甘さ、即ち頻発する重大災害の発生と、生産計画の未達成等示される無責任体制などが、最大要因であることは紛れのない事実である。吾々は、労働条件の基本である賃金のベースアップはゼロ回答、期末手当は大手見合額の50%、又超過労働手当も切捨て等を敢て容認し、北炭の総ての労働者の犠牲による再建の途を選んだのであり、本計画の速かなる実行と、経営姿勢を厳しく監視し再び同じあやまちを繰返さない

決意を新たに再出発に臨んだものである。

(イ) 〈清水沢炭鉱より 65 名新鉱に出向〉

新鉱の出炭量が北炭の命運を左右することは衆知のとおりであり、8月1日会社提案により作業を進めていたが、計画出炭確保の救援隊として清水沢炭鉱より夕張新鉱へ、8月17日から12月30日まで出向させる事を決定した。

ちなみに出向職種別人員は、採炭 30 名、支柱 24 名、内運 5 名、内機 3 名の 65 名と職員 5 名であった。

○その他 経費の抑制を図るため夕張地区の住宅の集約、一部勤務時間の変更(事務、経理、地質 etc)、社員浴場の休日休みの実施等を中心にして出来るものから実施し、経営基盤作りに奔走した日々であった。

(ロ) 深刻化する石炭情勢

53 年末では各山元で貯炭が急増して来ており大きな不安をなげかけていた。

その状況を全国的に見ると 52 年度末殆んど皆無に等しかった貯炭は月平均 18 万トンずつ増え、本年 11 月現在 325 万トンを超えている。そして、現状のまま推移すれば、53 年度末には 370～390 万トンに達するものと見られていた。

このような貯炭の急増は、石炭産業を新たな危機に追込んでいるが、その原因については、政府は「景気回復の遅れに伴う鉄鋼生産の停滞、円高進に伴う国内炭の相対価格の上昇」をあげている。

然し例えば原料炭について見ると、確かに鉄鋼生産の停滞により原料炭消費も減少している事は事実であるが、それでも依然として大量の輸入炭(弱粘炭も含め)が消費されており、政府が第 6 次石炭政策に示した「国内炭の優先使用」という原則を貫くとするならば、国内原料炭の「供給過剰」という問題は充分吸収しうるはずである。又、一般炭についても政府は「石炭火発の新設には、リード・タイムを要することから、ここ 2～3 年は大きな需要増は期待できない」との態度を示している。然しこれとても、我々が何年も前から、石炭火発の増設を政府に要求して来たところであり、政府が一貫して、これの怠慢から現在一般炭需要の頭打ちを招来したといっても過言ではない。

この様に見て行くと、貯炭急増に象徴される石炭産業の危機状況は、とりもなおさず、政府・独占資本の対応姿勢の甘さが必然的に生み出したものであると考えられるのである。

2. 石炭危機に対する政府、石炭業界の対応策

(1) 通産省は斯様な状況の中で、秋頃既に生産制限の考え方を固めて居り、11月10日にもたれた炭労と通産省との交渉の席上「5～6%の生産制限が必要である」旨回答している。そして第 3 次中央行動に際して、12月7日開催された交渉では、

- ① 当面需要は 1,750 万トンか 1,850 万トン程度と考えられる。
- ② 需要規模に見合った生産規模とする事が必要である旨、同省の考え方をのべている。つまり需要規模(生産規模)が下限に落付いたとして、2,000 万トンベースから見ると 12.5%と

いう大幅な生産制限となるのである。然し、通産省としても、生産制限の一環として閉山を行う事については、その様な考え方がない事を回答している。

新たな石炭危機が深刻化する中で、通産省は生産制限という極めて安易な方法で対応しようとしている訳であるが、問題はそれだけにとどまらず、例えば石炭産業の将来展望について「当面生産制限を一定期間行ない、その間資金をつないでゆけば、その後は2,000万トン体制に充分復元して行く事ができる」旨の発言に見られる様に、石炭産業が内包している問題点——海外炭と国内炭の値差の問題、悪化する稼働条件への対応の問題、労働力の確保を含む生産体制の確立の問題等々について、これを契機として積極的、抜本的に改善して行く姿勢を何一つ示していない。

- ③ 又石炭産業界の態度を見ると、石炭協会は第2次中央行動（11月17日～18日）の時点までは「生産制限はコスト・アップをもたらし、收拾のつかない事態を招来しかねない」として、極力これを回避してゆく考え方を示していた。然し第3次中央行動の段階では、「閉山首切りは考えていないが、それにしてもなん等かの対応策が必要である」として事実上の生産制限に踏み切らざるを得ない情勢にあるとして協力を求めて来ているのである。
- ④ 生産制限問題をめぐる政府と業界の態度は以上述べた通りであるが、石炭資本各社は、既に12月6日、54年～60年までの需給計画案、54年より56年までの生産計画案を通産省に提出し、同省のヒヤリングを経て、12月中にも、各社別に生産制限の大綱について確定される公算も出てきている。そしてこの大綱的な計画を踏まえ、以降、その具体化について検討が進められ、明年2月～3月段階には、生産制限計画全体が確定される事となろう。

以上に基いて職員組合は生産制限の具体的計画が確定されるものと考えられ各山元の計画を早急に検討すると共に、炭職協傘下各支部からの計画内容の集約を行い、掘り下げた情勢分析を行い具体的推進について検討して行くこととなった。

尚同時に54年度石炭予算を始めとする石炭政策問題をめぐる国会審議も進められる事となるが、これに対しては、社会党をはじめ友誼団体共結集を図りつつ石炭政策要求の実現を図って行く。

四章 分社后夕張職員組合時代

厳しい石炭情勢の中ではあったが、新炭鉱は原料炭中心であり、長期契約もあって、計画出炭を達成すれば、生産制限の波に関係なく安定基盤に乗れると言う恵まれた環境下にあり、一進一退を繰返し乍らも昭和54年を迎えた。然し本社の管理費を3社で応分の負担と言う事もあり、月々の資金繰りは決して楽でなく、分社の精神であった独立採算の面では、相変らずドンブリ勘定的に融通し合ったのが実態であった。

(一) 夕張新鉱と職員組合の交渉問題

(イ) 技術顧問問題の提案

新炭鉱の技術顧問として三井鉱山倉岡隆輔常務の受入れについて林千明社長より説明あり。組合との接見では新鉱の事情説明をした後、職組の結論として、「技術的に他社に較べて劣っていないと考える、只決めた事を何故守らないのか、もつれた糸をどう解きほぐし、どう方向づけるかだと思ふ。その為には社長の方針を明確に打出すべきだ」と申上げた。

(ロ) 54年2月26日夕張山元で緊急労使協議会が持たれ、会社は次の合理化案を提案する。

内容は次の2点である。

① 生産体制の整備

○出稼不良者の整理、私病による長期欠稼者の解雇等、実働人員の確保を前提とした諸対策の実施

② 坑外部門の縮小

○管理機構の改革

○病院の統合廃止

○地質調査所の閉鎖～北星コンサルタントへの移管

○浴場の集約

職員組合は職場啓宣、地区委員会開催討議、職員分科会の交渉を重ねながら3月11日最終団交にて妥結し、確認した。

(ハ) 54年4月 選挙闘争

組織として政治的にも経済的にも極めて厳しい情勢の中で、吾々の目的を達成するために、昨年12月前委員長であった本間徹氏を市議会議員統一候補として決定し、真谷地職組と強力な連携の下、全組合員家族の総力を結集し、見事前回の雪辱を果すことが出来た。

(ニ) 54年8月 労使協議会に於て清水沢より新鉱への出向提案される

昨年10月の分社以来、新炭鉱は出炭不振のため、極度に資金繰りが困難となり、重大な危機に直面している。現状坑内人員の減少、出稼率の状況を見ても安定生産確立に必要な人員を確保することは、不可能と判断され、このため坑内状況は悪化し採炭準備、保安の均衡のある体制は未達成となり、危惧の念が極めて大である。速やかに安定出炭体制を確立するため緊急措置として清水沢炭鉱からの出向により不足人員を確保する以外に方策なしと判断し、9月中旬坑内員113名社員7名の出向を提案する。(9月17日入山する)この結果10月からの計画達成に市中民間ユーザ等に好感をもたれ、又石炭情勢も王子製紙、秩父・宇部セメントの油炭の転換、苫東(厚真火力)も325,000トンの引取り等も決まり内外情勢は好転しつつある。

この上に立って安定軌道に乗れるかどうかターニングポイントであり一番大事な時期である

と判断し労使一致協力して、如何に 4,000 トン体制をキープするか、真剣に取り組む意志統一をする。

この時点でも新炭鉱の現状問題なしとしない。(切羽移行、掘進の遅れ)

然し問題点はこれこれだ～だからこれこれをこういう風に取り組んで解決するんだ～所謂問題をこの 1 年間で的確を絞って来た。問題に対する対処の仕方が大きく変わった事は喜ばしい事とで地味ではあったが生産効率の面で前進と受取めている。

(ホ) 54 年度給与交渉妥結

会社の業績乃至は調和の中で進められていた期末手当、給与交渉も、4,000 トン達成、出稼率 81.5%を条件に、期末手当は 50%給与は大手の 80%見合いを 12 月支給から実施することになった。然し期手も 30%分は来年四月以降支払と言う厳しい内容となる。(出炭不振から実施は 1 月からに変更となる)

(ヘ) 55 年 4 月末清水沢鉱閉山の提案

1 月 14 日労使協議会の席上提案となり、炭量枯渇は調査の結果同意するも、北炭そのものの経営状態が、依然として危機的な状況にあることから「閉山諸条件」については当然交渉は難航に難航を重ねたが退職時の特別加給金の上積みにより、3 月 5 日妥結する。

(ト) 技術顧問制度設置さる

北炭夕張炭鉱 KK を中心とし、分離生産 3 社の安定生産体制確立のため技術助言を行うことを目的とする。当面夕張新炭鉱の生産体制立て直しの為の技術指導を行う。

顧問の氏名及資格

倉岡隆輔 (三井鉱山 KK 常務取締役)

松田修 (三井石炭鉱業 KK 常務取締役)

任期

自昭和 55 年 7 月 1 日

至昭和 56 年 6 月 30 日

北炭 KK 非常勤顧問とする。

顧問料 半期 30 万円とし出張経費は別途支出する。

以上

吾々との幾度かの懇談の中では、技術顧問倉岡隆輔は次の 4 点を助言する。すなわち、

- ① 骨格構造の欠陥
- ② 管理者教育の実施
- ③ 職組は少くとも月に 1 度は会社幹部と会って積極的に提言リードすべき
- ④ 一転制度を打破し定額給者でも請負作業の実施出来る内容があれば切換えれる

等々の指摘があり、会社ぐるみの積極姿勢を強調される。

(二) 夕張新鉱南排気斜坑自然発火と対策

南排気斜坑自然発火による坑内火災発生とその対策は次の経過となる。

- 1) 発生日時 55 年 8 月 27 日 22°50' 頃
- 2) 事故現場 南排気斜坑 (坑口より 1,980 m の位置)
- 3) 状況と経過

該箇所は 10 尺炭貫縫箇所であり 1 週間程前より温度上昇のため要注意個所に指定、係員付添の下に穿孔注水により冷却作業をしていた。10 時 30 分頃一部炎を発見したので、ロング係員鉱員の応援を得て消火作業に努力するも小崩落が続き消火作業が不可能と判断され、

1. 保安監督員より異常を指令室に連絡
 2. 坑内全域に対し入坑者全員 (592 人) に出坑指令を出した。
 3. 入坑者全員出坑確認
 4. 救護隊 2 ケ班入坑、その後逐次入坑作業
 5. 南排気斜坑下部地作り完了
 6. FA 流走 30 分間
 7. 全員出坑命令～出坑完了
 8. 立坑附近探検に救護隊の出動について協議する
 9. 坑内探検入坑 (夕張 3 ケ班 幌内 1 ケ班)
 10. 救護隊 3 個班、職員 18 名入坑作業
- 4) 事故後の実態と対策
- 27 日 南排気斜坑の地作り作業及延焼防止作業に入る
- 28 日 朝方までに火勢は衰えず南排気斜坑、中央立入をなめ尽し排気立坑に向って延焼中
- (一方) 南排気斜坑の地作り作業及坑内作業者全員出坑命令
- 職労より会社へ第 2 次災害のおきぬ様万全の対策を立てる様申入れをする
- (二方) 繰込待機及坑外作業
- (三方) -600 レベル作業及坑外作業
- 29 日 (一方) 坑外作業及繰込待機 鉱員は一・二・三方共自宅待機
- 30 日 CO も減少した事から終息に向ったと判断、以後途中経過は省略するが中央第 1・2 立入の密閉、排気風道の取明け、風道切替等、何んとしても一日でも早く復旧として全力を傾注、10 月 11 日出炭再開にこぎつける。

(イ) 55 年下期々末手当

夕張社の実態を理解し不満ながら越冬資金として 195,000 円を確保する。

尚、年の暮れ 28 日には出炭減挽回の方途として一・二方休日採炭を実施する。

(ロ) 自走杵についてのデータの検討をする

自走杵の使用により7月迄のデータ集約を行ったが、西独へムシャイド製自走杵の補修維持費は三井製作所製のシールド杵よりも2倍の補修維持費(46万円/年)が掛かるところから種々検討した結果、操作回路のホース部品も簡単なシールド杵を今後採用することとし直接天磐が軟弱なため前カップの改造も含めて新規発注をすることと決定する。

(三) 新再建整備計画認定

営業開始以来を簡潔に振り返って見ると、夕張新鉱は50年6月から営業出炭の開始となった。

50年上期の平均は日産1,107トン、下期は逐次ロングを増やして1,751トン、51年上期は3ロングで2,598トン、下期は3,004トンの実績であった。

52年1月から待望の4ロング体制となったが、5,102トンの目標に対し、上期3,963トン下期3,966トンと大巾に下廻る実績となった。この結果52年12月5日の特別労使協議会では、5,272トン体制は、56年からとし、その間は体制を整備して、略4,500トンペースで推移する方針を明らかにした。

然し実績が示す通り、53年上期4,018トン、同下期3,744トンと振わず、53年1月18日協定された、北炭再建見直し計画および同計画の修正計画が53年5月10日に協定される結果となった。

その計画によると、54年度は4,300トン、55、56年度が4,500トン、とはじめて5,000トンの看板を降すことになった。

53年10月から生産3社が分離され、夕張新炭鉱は、清水沢炭鉱と共に北炭夕張炭鉱KKとして独立した。

全社一丸となって再建に取組み、犠牲の上に立った合理化に耐えながら頑張ったが、54年度は上期3,625トン、下期4,017トン、55年度は上期3,404トン、下期2,830トンと最悪の状態を迎えていた。然も55年8月27日南排気斜坑で坑内火災が発生し、その対策で45日間生産ストップの憂目をみた。

この結果、経営は更に悪化し、世間の批判はますます厳しくなり、事故後の新鉱再建計画を提出しても、政府および石炭鉱業審議会は審議の対象としなかった。

石鉱審は、56年1月25日北炭問題専門家による技術調査団(団長伊木正二東大名誉教授以下5名)を派遣し、新鉱調査を実施し要望意見をまとめた。

この意見を入れて新鉱再建計画は石鉱審に提出され、条件付きで認可された(56.3.20)。その出炭計画は、56年上期3,670トン、下期3,610トン、57年度3,950トン、58年度3,970トンとし、北部開発に重点を置き、57年3月から出炭を開始し、平安8尺層は59年1月から出炭することになっていた。

北部開発の現状に照して見ると、この厳しい石鉱審の指示等があって、北部出炭計画を2ヶ月^{メートル}早めた。月延び150Mの急速掘進などの体制が押し進められ、2ヶ月早めた出炭計画を目指

して、北部開発は急速な開発の拍車がかけられたのである。

吾々としても、北部方面は地層炭層共西部と較べると比較にならない程素晴らしく、今迄苦勞をしても実績が上らず、勿論このためユーザへの石炭供給の間で多大の迷惑を掛け且政府をはじめ市民間の批判をいやと言う程味わった苦汁を一気に晴らすべく起死回生の思いで、吾々は急速掘進の作業指針、方法、後方運搬等一連のバックアップ体制、特にガス抜について細部にわたって、係長以上職勞も含め、深更^{しんや}にわたって生産会社の中で討論し、絶対の自信を持って開発を進める決意であり、期待もしていた。

この計画は、政府援助の最後通告ともいうべきもので、これで再建出来なければ、自ら自決せざるを得ない内容の条件がつけられていた。

ところがこの計画が石鉱審で確認された翌4月の実績が、計画の3,750トンに対し、2,563トンとはるかに下廻ったため、このままでは会社をつづけていけなくなるとして、前述した北部開発は2ヶ月早められ、57年1月出炭の計画に改めて9月25日の石鉱審で認可をうけた。

その後間もなく(10月16日)あの恐ろしいガス突出災害が発生し、93名の尊い生命を奪い、北部で必ず再建できると耐えてきた全従業員は非情な鉄槌を受ける結果となった。

災害後の再開に当っては、その点を厳しく反省し、ヤマの実体に合せた計画にした結果1ロング体制の時も2ロング体制の時も、ほとんど計画出炭を達成した。

国会でもそのことに触れ、事故前の計画は、ヤマの自然条件や人員などを無視したあまりにも無理な計画ではなかったかと指摘されたが、総ては悪夢のごとく胸を去来するのみとなった。

こうして56年10月までの過程で、52年の7月から8月にかけて、5,000トン以上の出炭は7月12日念願の目標を達成し5,142トンに始まり、最高5,747トンを記録したものの、延17日間で終わった。

五章 夕張新鉱ガス突出の発生と職員組合(夕張)の解散

(一) 昭和56年10月16日夕張新鉱ガス突出災害

先に述べた様に9月25日石鉱審で認可された「新再建計画変更案」は生産計画のみ示すと

1. 西部、北部区域採掘計画の変更

西部の条件悪化により、3ロング体制から2ロングで終掘し北部開発を2ヶ月早める。

北第5上段ロングの稼働スパンの短縮、切羽位置並に進行方向を変更する。

2. 北第5後向ロングについても、始発位置を変更し、北部区域の出炭は57年1月とする。との内容であった。この新計画を実行するため急速掘進方式を採用し、第五上部坑道も同盤下坑道も掘進先数が2倍の四先^{メートル}にふえ、月延^{メートル}Mも150Mとなった。

特に、切羽の進行方向が変わって、始発部が従来よりも断層の近くに設定される結果となり(7号断層、同副断層の走りの影響確認等により)断層に向ってゲートが掘進され、16M^{メートル}進んだところでガス突出が発生した。

10月16日、12時41分頃、北第五上段ロングゲート（坑口より3,340 M^{メートル}、海面下809 M^{メートル}）でガス突出（一次災害）が発生した。想像を絶する大規模な突出ガスと爆発に83名の尊い生命を一瞬のうちに奪う大惨事となり、その救助に向った10人の救護隊員たちも、その後の二次災害の坑内火災で生命を絶たれたものと推定される。当時北部区域には160名が入坑していた。

この災害は、戦後の炭鉱災害で第3位という不名誉な記録を残して、ヤマに生きる人達を怒りと悲しみのどん底につき落した。これがやがて北炭の倒産と夕張新鉱の閉山への軌跡を辿ることとなった。

遺体収容は、災害直後から救護隊や仲間によって開始され、日曜や正月休みも返上して続けられ、翌57年3月28日（163日ぶり）に全遺体が収容されたが、次の経過を仙った。

- 56年10月17日 坑内状況悪化、救護活動に生命の危険を憂慮、林千明社長水封を提案するも遺族納得せず
- 18日 Air バックで仮密閉（北部北五排気部、北第四磐下坑道 etc.）
- 23日 坑内注水開始
- 28日 -757 Level 迄注水完了
- 29日 探検行動開始
- 11月2日 揚水開始
- 5日 揚水について取明開始
- 6日 遺族会結成される
北炭再建遺家族救済で北炭職組 OB 会募金活動に入る
- 9日 政府技術調査団現地事情聴取
- 16日 全国支援要請キャラバン隊出発
- 21日 日経新聞で保安体制の強化の記事の中（自己保安管理について労使合意文）で停止権の問題が取上げられ恰も労組の判断で行使出来ると判断される報道のため、問題となり道と通産に会社・職組・労組出頭して事情説明をする
- 23日 保安作業開始
- 12月3日 遺体収容作業～手順・方法・収容時の取扱連絡等最終打合せ
- 7日 林千明社長自殺未遂
事故以来北海道と東京を往復の連続で、精神的にも肉体的にも疲労困憊^{バイ}の極に達し発作的に自殺を図ったとみられている
それにしても内外でショッキングな出来事で、経営の責任者として、一番重大な時期に責任放棄に等しい行為に対する憤激と一方では同情の声と交差し波紋を呼んだ
- 15日 会社更生法適用申請
自律再建の期待を裏切り坑底に53名の遺体を残したまま、経営放棄の行為

で非難の声を大きくした。然し破産を防ぎ再建の道を進めるためには、更正法につなげる以外にないと言うことで労使一致してこの道を支持する。

- 12月16日 保安全管理人に山根喬弁護士を選任
- 56年12月17日 21°00′頃、北部排気センサーでCO 1～2 ppm 検知される
- 18日 6°00′現在、8～9 ppm に漸増傾向を示した
種々調査の結果、北五上部坑道よりの滲出であったが、溜りの流出か自然発火によるものか判定出来ず
対策～入排気ビニールチャンバー及木煉瓦密閉を排気側にして観測する
- 19日 1°00′密閉完了、急激にガス濃度上昇
3°15′入気側に張出し 60 ppm に達し退避命令
3°45′注水開始
- 20日 23°45′注水完了 -752 Level 迄 11,324 m³ Gas 払
- 21日 上部坑道の状況把握のため Boring 準備
)
- 23日 ボーリング3本穿孔
状況検討の結果上部坑道の自然発火と判断、急硬剤を混入 ^{フライアッシュ}FA 流送して坑道の一部密閉をし、今後の取明け作業中の通気防止の対策をする
- 25日 全員就労体制となる
- 57年3月28日 全遺体収容される(163日ぶり)
- 4月10日 合同葬

(二) 夕張新鉱ガス突出と再建問題の経緯

イ 北炭夕張炭鉱 KK に関する当面の考え方について

石鉱審政策部会では

1. これまでも幾度か重大災害が発生しており、特に保安の確保には万全を期して、その再建を図ることが求められてきたにもかかわらず、再び重大災害が発生したことは誠に残念である。
2. 当面の急務として、罹災者の救出と遺家族に対する補償に誠意を、又当面の資金計画も本来企業の自己責任に帰すもので、これらに万全を期するため、諸経費の節減、資金の自己調達に最大限の努力を払う必要がある。
3. 夕張社の今後の在り方としては、従来同様私企業の原則に立ちつつ、保安の確保を第一として、自然条件、技術的能力等について経営上の視点をも踏まえて、徹底的に再検討し、経営管理体制について見直す必要がある。
4. 尚当面の資金対策については、取りあえず政府においては返済猶予等について所要の措置を講ずるとともに、その他の関係者においても可能な配慮を期待する。

ロ 政府調査団の報告書

夕張新炭鉱事故調査委員会(委員長伊木正二東大名誉教授・委員磯部俊郎北大教授以下10名、専門委員6名)は、政府の委嘱を受け、11月5日から57年7月2日まで現地調査や大学、関係試験機関での分析、試験の結果をまとめて「事故調査報告書」を提出した。

大綱は次のようなもので明らかに人災の色彩が濃いといわれるものである。

一次災害(ガス突出)

- (1) 当該区域が他区域に比し、地質条件、ガス抜特性など多くの面において、ガス突出に関し、不利な環境におかれていた。
- (2) 災害発生個所である北第五ロングゲート坑道の掘進方向に、断層擾乱帯が存在することが確認された。
- (3) また、予兆、前兆とみられるいくつかの現象が、事前に現われていた。
従って、今次災害は、このような状況の中で北第五上段ゲートの掘進を進めた事により発生したものであり、当該ゲートの奥部に対するガス去勢が不十分であったことが原因と考えられる。

二次災害(ガス爆発の火源)

試験・検討の結果ガス爆発の火源は、静電気であると推定された。更に推測するに、二次災害発生当時該坑道第2ボーリング座附近で、ガス誘導管の補修、第一立入よりのガス流出防止等のため、救護隊員等が進入していたことが判明しており、これ等の者が携行したビニールシートを急に剥離したとき、或いは、帯電状態にあった救護隊員等の身体又はビニールシートが鋼棒等の物体に接触したとき、静電気による放電火花が発生し周辺の可燃性ガスに着火した可能性が強い。

以上

この報告書に基き処女地帯の北部開発に対する会社の計画に齟齬がなかったかどうか、特に人員配置、ガス抜、急速掘進等とガス突出の関連で刑事事件として取上げられることとなった。

ハ 会社更生法のもとで

57年1月5日 機構改正発令

遺体収容作業を最優先するため「北部取明班」を設置する。

災害の原因究明を徹底的に行うため「災害調査室」を設ける。

機構を簡素化するため、技術部の廃止、総務部と経理部を一本化するなどの機構改正をする。

1月6日 山根喬保全管理人より他山への派遣・出向提案

逼迫する資金繰りの中で資金の繰り延べと出向154名について及び500人いる下請作業員を北炭グループや他山に引取ってもらう。

- 2 月 15 日 出向となる人は次の人数である。
真谷地炭鉱 57 名 職員 6 名
幌内炭鉱 63 名 職員 8 名
尚出向者の取扱, 身分は夕張炭鉱の在籍とし出向先との兼務発令とする。勤務給与は出向先の業務実態とする。
期間は会社更生法の日途がたつまで。
- 2 月 22 日 望月武義調査員が経営報告書提出される
56 年 12 月 23 日札幌地裁から選任された望月武義調査員 (公認会計士) は調査結果を纏め地裁に次の結論をつけて提出した。
「再建は, 諸般の事情よりして極めて厳しい環境下におかれているものと思われる。この諸条件を克服して労使一体となり, 北炭社ならびに北炭グループも再建に積極的に取組み, 債権者, 国などの協力が得られれば, むこう 12 年間で更正の見込みがあるものと思料される」
- 4 月 1 日 電力所, 真谷地移管となる
悪化する資金繰りで賃金支払いの目途もたたなくなり, その資金対策として, 清水沢電力所, 滝の上発電所を約 18 億円で真谷地炭鉱に譲渡することとなった。この代金の一部として道から約 5 億円と国から近代化資金約 5 億円の融資を受け 1 月 29 日賃金を支払った。1 月 27 日付で譲渡された電力所は 3 月末まで夕張社が委託管理していたが 4 月 1 日正式に移管した。
- 4 月 1 日 3 月 11 日の「自立体制確立のための緊急提案協定」で炭鉱病院を公的機関に移管すると決め, 関係者間で協議を進めていたが, 市議会の下承を得たので, 4 月 1 日から夕張市に委託することとなった。
その後関係方面との話も進み 12 月 1 日より正式に移管された。
- 4 月 19 日 管財人に大沢誠一氏推薦される
難航を続けた管財人は安部晋太郎通産大臣が有吉新吾石炭協会々長に要請したことから, 三井鉱山監査役を石炭協会副会長として推せんしてきた。
- 4 月 30 日 札幌地裁は大沢誠一管財人を選任し, 更生手続を開始した。
同時に管財人代理に橋口滋郎石炭協会事務局長, 対馬健太郎北炭専務 (後に粕谷直之社長と交替) も選任された。
- 6 月 24 日
〈第 1 回関係人集会開く〉
債務は 1,156 億円, このうち北炭社関係の債務保証を除く自己弁済分は 836 億円, 労務債 123 億円におよぶことが明らかになった。

8月21日

〈大沢誠一管財人による閉山，全員解雇の合理化案提示される〉

大沢誠一管財人の更生計画は遅々として進まず特に、北炭グループによる労務債弁済の目途がつかなければ更生計画は作れないという中で、萩原吉太郎前北炭会長の社会的責任が大きくクローズアップされてきた。

こうしたなかで、地元夕張では7月23日5,000人を結集して「夕張新鉱再建貫徹市民大集会」が開かれ、雨の中、光を求めての進行が行われた。

そして、札幌東京でも各支援団体の協力のもとあらゆる行動が展開されるなか、8月21日札幌において大沢誠一管財人より「あらゆる手を尽したが万策つきた」として、9月21日をもって事実上の完全閉山，全員解雇とする「事業縮小に関する提案」を行ってきた。我々はこれに対応する戦線を強化するとして、直ちに行動を展開することを確認、8月23日夕張新鉱労、職組とも抗議の24時間ストで緊急大会，集会，24日札幌行動，25日からは東京において中央行動を展開し，27日からは札幌グランドホテル，東京では萩原吉太郎邸に坐り込み，すでに18日から行われている清水沢駅前でのすわり込みと呼応して無期限のすわり込みに入った。

9月に入り5日には東日本縦断新鉱再建キャラバン隊が北海道を出発，8日夕張新鉱労組は四名がハンススト突入，10日には遺族団が犠牲者の写真を抱いての東京行動，15日炭労臨時大会，そして支援の輪は全国的な拡がりを見せるなか，夕張，札幌，東京で戦いは一段と高揚するなか9月20日を迎えた。

〈大沢誠一管財人より，21日の閉山提案を28日迄延期の申入れ〉

9月20日21日の全山ストを踏まえて，北炭と政府と萩原吉太郎前会長との交渉が行われたが大沢管財人から，「閉山後の再開発は新北部を中心にやりたいが，これから石炭業界で検討したい等」の回答がなされたが，組合側は，「ヤマの存続が確定していない，残炭掘などが含まれておらず，つなぎ対策が空白である等」と，まったく不満であるとして拒否した。

また，萩原吉太郎氏からは「労務債71億8,000万円までは目途がついた」との回答に対し「100%完済まで努力せよ」とこれも拒否した。

従って管財人はもう少し時間がほしいとして，21日の閉山を28日に延期することを表明したが組合は，我々の要求①ヤマの存続，②労務債の完済，③雇用の確保の何れも満たされぬ回答であるとして，21日全山ストに突入した。

その後，大量動員による中央行動を展開，共闘支援も更に強化され，凡ゆる面から資本，政府を突上げた結果，28日の閉山日が，10月6日さらに8日にと三度変更延期され，10月8日午前0時15分，一応終結をみるにいたったのである。

イ 新会社構想来年四月に具体案

10月7日安部晋太郎通産大臣より58年4月を目途に石炭業界による新会社を発足させ責任をもって再開発をおこなわせる、このため必要な資金援助をおこなう、また我々の主張を取り入れ、残存十尺層の採掘もおこなっていく旨の回答も引出した。大臣談話の形であったが、現状最も権威のある確約であると判断される。

又労務債については、結果的に89億2,100万円＋閉山一時金5億円、計94億2,100万円で妥結を余儀なくされた。

尚全員解雇にともなって、新たに発生する新労務債52億円の退職金については閉山買上げ交付金や賃確法の適用などによって退手協定による（会社都合解雇）の場合の支給額を確保することができた。

10月12日、確認大会を公民館で開催し退職者の代表も列席して、ヤマの存続、再開発に掛ける一念で、冷静に事態を受止め全員拍手で確認をした。

その後は協定事項の実施取扱い、援護協会関係との折衝、離職者の再就職関係、職安の手続き、病院移管問題等々息つく間もなく忙殺されたが、真谷地炭鉱、幌内炭鉱、空知炭鉱、南大夕張炭鉱等に再就職した仲間の勤務振りを非常に感謝されて我々も救われる思いをしながら再開発を誓ったものであった。

昭和58年を迎えたが、夕張新鉱の問題はむしろ困難を増しつつあり、その原因は〈北炭夕張新会社に暗雲〉再建評価まだできずの点である。すなわち、北炭夕張炭鉱の債権調査期日集会在札幌地裁民事第四部で開かれたが、担保つき債権の評価ができず流会となった。調査期日は改めて4月28日になる。

債権額の確定と同鉱新会社問題は不可分の関係にあるので、調査期日の大幅な遅れは日本石炭協会による新会社問題の検討に影響を与えそうな状況となる。

ロ 5月、石炭協会の閉山答申書

5月19日、石炭協会は、大手5社の社長会に於て「新会社による再開発は採算的に極めて困難」との結論を打出し、翌20日に答申書を提出した。

答申書によれば、実収炭量を1,353.7万トン、年間70万トン採掘し24年間で終掘する。初期の投資総額は406億円となる。開発着手より終掘までの総合収支（閉山条件の過去の実績も含めて）は888億円の赤字となる。

而も本計画には現実面における保安管理体制の問題、或いは保安技術職員をはじめとする人員確保の問題、出勤率確保の問題などについて、幾多の不安定要素を抱えており、実施面において更に悪化する危険性をはらんでいる。

検討委員会の結論としては、残念ながら夕張新区域十尺層の可能性は見出し難いと答申している。

（三）夕張新鉱閉山と北炭職員組合（夕張）の解散

イ 山中通産大臣と横路知事の対応

この答申書は山中通産大臣に提出されたが受取らず、「この答申書をストレートに受取れば、国も再開発を断念したことになる。一パーセントでも再開発の可能性があればそれを追求するのが政治家の使命だ」と言って、豊島資源エネルギー長官預りとした。逆に、①道、石炭協会及び夕張市が出資する第三セクター方式で新会社を設立する。②道・石炭協会がこの提案に合意すれば、政府は資金面で最大限の努力をする……などを骨子とする山中提案が提示された。

この新提案に対しては衆参の炭労政治局員から強く国の責任において再開発するよう要求された。

この大事な時期に山中通産大臣が突然入院して辞任したため四人目の宇野通産大臣が6月10日就任した。

横路知事は6月17日、宇野通産大臣に先に示された山中通産相の「新提案」に対する回答を行った。

その骨子は、①道としては応分の出資をする、②新会社は石炭業界の主導で運営する、③新会社に国策会社である電源開発が使う海外産の輸入代行業務をさせ、その口銭で新会社の赤字を埋める、というものであった。

これをうけて通産省として関係方面の意向をたざした末、7月11日最終的に大臣談話で「再開発は不可能で断念する」と表明し今後は失業対策、地元中小企業対策など事後対策を打出して、事実上廃山されることとなった。

ロ 労務債9月迄に支払う

7月29日、炭労と前後しながら萩原吉太郎三井観光会長、粕谷直之北炭社長、大沢誠一管財人と交渉、旧債89億2,000万円のうち、これまで17億4,600万円が支払われ、残額71億7,500万円のうち労金分は(11億6,700万円)北炭が肩代り別途清算、残る60億800万円を期限内に支払うとして支払日を提示、これを了承して確認書を取交す。一方新労務債については、まだ12億円残ったが、更生会社の資金繰りとの関連から具体的な支払い用途を示さず物別れとなったが後日の折衝で予定通り9月末支払う約束をした。

かくして、夕張新鉱が閉山し、営業開始以来8年足らずの運命であった。9月末までに予定通り7つの坑口密閉も終り永年の眠りについたのである。

ハ 北炭職員組合の解散式

夕張新鉱が閉山され、この結果、北炭職員組合（夕張）は解散式を行うべく10月2日、午前11時より、夕張市民会館にて、幌内・空知の友山、札幌など遠く離れていった仲間100人弱が集まり、「解散式」を行った。53年10月分社以来、悪戦苦闘の想いに包まれ、僅か5年で万感

の思いを残して組合旗は引き降ろされたのである（組合旗は歴史村博物館に保存）。

集まった組合員は委員長北野潔、書記長吉田文男を先頭にして式後懇親会に移り、久々に会った仲間ともどもなごやかなひとときを過し^と再会を約して散会した。ここに北炭職員組合(夕張)は北炭社と共にその歴史の幕を閉じるのである。北炭社の100年史を回顧するならば、北海道炭鉱汽船(株)は三井資本に翻弄され続けて、諸行無常の歩みをここに終えるのである。